

品川区子ども・若者シンポジウム 2019

「自分らしく生きる～孤独と共生を考える～」

報告書

2019年11月9日(土)

品川区子ども未来部

子ども育成課

品川区子ども・若者シンポジウム 2019

「自分らしく生きる～孤独と共生を考える～」報告書

目 次

1. 報告書概要	 1
2. 基調講演 医師の立場から見る子ども・若者のこころ	 3
3. パネルディスカッション 社会の変遷と若者たち～これから私たちができること	15
4. アンケート結果	30

《参考資料》

- ◆当日配布資料
- ◆アンケート用紙
- ◆デザイン紹介
- ◆チラシ

品川区子ども・若者シンポジウム 2019 「自分らしく生きる～孤独と共生を考える～」報告書概要

本報告書は、令和元年 11 月 9 日（土）に行われた品川区子ども・若者シンポジウムの内容をまとめたものです。当日は、児童精神科医 田中哲氏による基調講演の後、パネリスト 3 名とモデレーター 1 名により、パネルディスカッションが行われました。聴講者は品川区内外あわせて 189 名でした。

概要は、本シンポジウムの位置づけと内容およびシンポジウムの成果を踏まえた子ども・若者施策への提言等について、まとめたものです。

1 はじめに

子ども・若者は、本人はもとより親や家族にとって、また、社会にとっても、大きな可能性を秘めたかけがえのない存在です。自分らしく生き生きと心豊かな大人へと成長していくことは、社会共通の願いといえます。

しかしながら、近年、不登校やひきこもりなど、生きづらさを抱える子ども・若者は急増しており、彼らの社会的自立をめぐる問題は年々深刻化しています。こうした問題は、保健・医療、教育、福祉、雇用等、様々な分野で生じており、子ども・若者の抱える課題の複合性・複雑性を踏まえた重層的な支援の充実が求められています。

品川区においても、こうした課題に取り組むべく、子ども・若者育成支援推進法を根拠に、総合的な子ども・若者育成支援施策の第一歩となる「品川区子ども・若者計画」を平成 30 年 3 月に策定しました。同計画は、すでに展開している大小 200 にも及ぶ支援施策を体系化するとともに、基本理念を定め、家庭、学校、地域その他の社会における構成員が、各々の役割を果たしつつも相互に協力しながら一体的に取り組むことを目指しています。

さて、今年の 5 月に元号が平成から令和に改元されました。平成時代 30 年間を振り返ってみますと、現在の社会は、インターネットの発達や個人情報保護など、理由は様々ですが、人々がフェーストゥフェースで語らい触れ合う機会が減り、つながりや支えあいといった関係性が持ちにくい時代になったといわれています。また、子ども・若者の抱える多様なニーズに対応するため、それを支える地域コミュニティも目的ごとに機能分化しており、それぞれの領域を跨ぐ支援が手薄な状況といえます。家庭においては親子の絆を深め、学校においては学力の向上と人間形成を図り、地域においては、社会性を育む場であると同時に、活躍できる場であることが重要ですが、それぞれの領域における役割を教えて、社会的な包摂という観点から一体的に取り組んでいく必要があります。

そのためには、今一度、平成時代が子ども・若者にとってどのような時代だったかを振り返り、令和に向けて、子ども・若者のために何が必要なのかという問いに向き合う必要があると考えました。そしてこの問いを、一部の方だけでなく多くの方と共有したく、生きづらさを抱えた子ども・若者にとって「自分らしい生き方とは何か」をテーマに子ども・若者シンポジウムを開催することにしました。

2 講演・パネルディスカッションの概要

シンポジウム開催にあたって、3つの視点を設け、それぞれの視点の解説者として相応しいと思う方にお声かけしました。

まず、子ども・若者本人の心に寄り添った視点からの解説を、児童精神科医の田中哲先生にお願いしました。田中先生は、日々、子どもの診療を行うとともに、発達障害のある子の地域ネットワーク作りや、子どもの虐待防止のための活動にご尽力されている方で、基調講演講師とともにパネルディスカッションのパネリストとしてご参加いただきました。

次に、生きづらさを抱える子ども・若者が増えた背景や社会構造の変化・影響などをマクロ的に考察する視点からの解説を、社会学者の井出草平先生（大阪大学非常勤講師）にお願いしました。井出先生は、大阪市のひきこもり支援事業にご尽力されており、子ども・若者育成支援推進法などの制度論にも高い知見をお持ちで、パネルディスカッションのパネリストとしてご参加いただきました。

3つ目に、子ども・若者と社会をつなぐ視点からの解説を、子ども若者応援フリースペース代表の中塚史行さんをお願いしました。中塚さんは、品川区を拠点に長年にわたり地域で活動し、多様な背景をもつ子ども・若者の居場所支援に携わってきた経験をお持ちで、パネルディスカッションのパネリストとしてご参加いただきました。

そして、最後に、こうした3つの視点をとりまとめ、パネルディスカッションの進行役としての役割を、品川区子ども・若者計画専門委員会委員長である河津英彦先生（元淑徳大学教授）にお願いしました。河津先生は、平成16年から15年にわたり、品川区の子育て施策に関わり、平成30年に策定した品川区子ども・若者計画の策定委員長として地域の特性や行政計画に深く関与してきたご経験をお持ちの方です。

以上、4名の方々により、今、子ども・若者の生きづらさに起因するものや、家族や地域コミュニティの在り方など、様々な議論が交わされ、よりよい環境整備のための具体的な取り組みについてヒントも提案されました。

本報告書では、そうしたことを議事録としてまとめたものです。ぜひ、お読みいただき、今後の子ども・若者育成支援の推進を図る上での参考資料となれば幸いです。

3 若者たちの協力

本シンポジウムは、多くの若者たちの力を借りることで、開催することができました。

チラシやクリアファイルのデザインを田邊雄一さん（東京工科大学修士課程デザイン研究科1年生）に、手提げバッグイラストデザインを平尾まりこさん（日本大学芸術学部デザイン学科2年生）に作成していただきました。

また、シンポジウムが滞りなく進行できるよう、子ども若者応援フリースペースを利用している若者たちにも協力していただき、会場誘導や受付など縁の下の力持ちとして様々な役割を担っていただきました。

◆基調講演

医師の立場から見る子ども・若者のこころ

講師：田中 哲（児童精神科医）



皆様、こんにちは。この6月に、やまねこという名前のクリニックを世田谷区千歳烏山でオープンしました、田中と申します。3月までは東京都立小児総合医療センターという子ども病院の副院長をしていましたが、それまで長い間、ずっと児童精神科医、若者の臨床ばかりやってきました。小児総合医療センターは大病院で、ほんとうに重くならないと来られないという病院だったのですけれども、やまねこを始めて、来る子どもたちの姿が、より地域に近いといえますか、今困っている真っ最中、困り始めたところという方が多くいらっしゃるようになりました。私自身、ちょっとそこがうれしいことで、子どもたちをできるだけ地域で支えるということができたらと思います。

今日は1時間いただきましたので、少し私の考えていることをお話しさせていただきます。

■はじめに

品川区のいろんな取り組みのことも伺い、それがどういう時代背景、あるいは心の背景を持っているかということを考えながら、私の話のキーワードとして「being」という考え方を挙げておきたいと思います。

今日のテーマと直接関係なさそうに見えるのですが、考え方としては大事に思っており、being とは何かということは最後のほうでまとめてお話ししますが、意味としては「存在」、「いる」ということです。今

日も居場所の話が出てきましたけれども、何か「する」よりも「いる」ということのほうが大事なんじゃないかと。子どもが自分でこれでオーケーだと思えたとき、何かをするから OK、何かをしたから OK というよりも、「あなたがそこにいる」というのが OK だよというのが、より子どもの本質に近い、子どもの一番支えてほしいところに近いものなのではないかと考えられます。

一番初めにある、子ども自身が自分がいても OK と感じる根っここのところにあるのは、自分が being によって支えられた経験、自分が一番見てほしいときにお母さんがいてくれた、自分が一番いてほしいときに友達がいてくれた、そういう、いてくれた経験なのです。いてくれた経験によって支えられるような、自分がいてもいいという感覚、これが子どもたちの非常に大事な部分なのではないかというのが、実は今日の私の話の粗筋、大事な部分で、なぜそのようになったか、それがどういうことを意味しているのか、それが今、品川区がやろうとしていることとどういうふうに関係があるのか、そのあたりを少し、思いをめぐらしながらお話をしていければと思います。

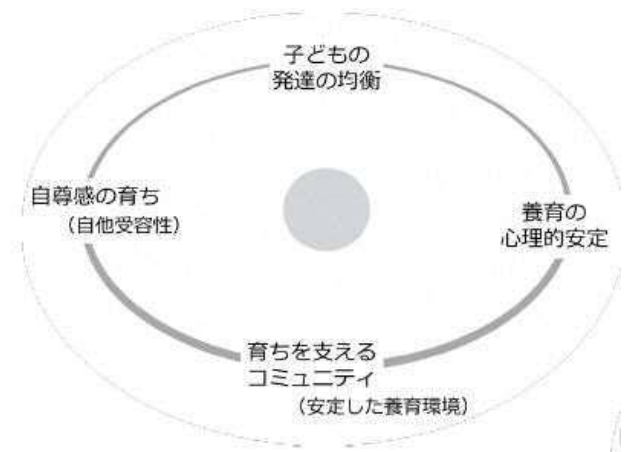
■子ども・若者の育ちとコミュニティ

コミュニティというのは人の集まりですよ。コミュニティと、人の心の育ちというのがどんなふうに関係があるかということを少しお話しします。

この話のベースとしてあるのは私の臨床経験、30年ぐらい児童精神科医をやっていますので、そこで見聞きしたこと、あるいは、常々思っていることなんですけれども、実は児童精神科医をやっている、やや内心忸怩たるものがある。それはなぜかというと、私が児童精神科医に成り立ての1980年代ころというのは、登校拒否、今でいう不登校、学校恐怖症とか学校嫌いとか、いろいろ名前が変わりますが、実態は変わらない、学校に行けない子どもたちのことというのは、児童精神科医の関心の中心だったんですね。そういう子どもたちに対してどうす

るのか。果たして登校拒否というのは病気なのか、病気じゃないのか。治療をするのか。それとも、治療以外の方法があるのかみたいなことが、かなり口角泡を飛ばす議論になっていた時代があるんです。それが違う流れにのまれていく。それが何かというと、多動の子どもたちなんですね。多動児の問題。あるいは、それが発展していった、発達障害の子どもたち。前後してずっとあるのが、いじめの問題。それから、心の問題になってくる、いじめ自殺の問題。それから、少年の非行問題も、暴れる子どもたちとか、族に入って走り回って、暴力振るってというのは、児童精神科とはあまり縁がなかったんですけども、そういう子どもたちが、だんだん非行の姿を変えまして、リストカットを繰り返す子どもたち、性非行に走る子どもたち、ネットがやめられない子どもたちみたいになってくるんです。そうすると、これは依存症とか自傷行動という私たちが使う言葉あるいは、ごくごく最近のことかというと、子どもの虐待の問題。虐待の被害を受けた子どもたちは、ずっと抱えて育たなきゃいけない。中には、自分が虐待を受けたということを、背景を背負って、今度は虐待をしてしまう親になっていく人たちがいたりするという問題があるんです。

児童精神科医がずっと関心を持ってやってきた現象の話をしたんですが、先ほど、内心忸怩たるものがあると言ったのは、こういった問題がどれも減らない。我々も一生懸命努力をしているつもりなんですけど、ちっとも減らない。いじめにしろ、発達障害にしろ、子どもの虐待にしろ、一生懸命努力をすればするほど減らないような気がする。それはどうしてだろうと思ったんですね。何で私たちがやることに対して減らないんだろうかと。子ども病院でのほかのことって、みんな減るんですよ。小児科の問題というのは、予防接種などでよくなったりする。子どもの数も減りますから、どんどん数が減るんです。ところが、子どもの数が減っているはずなのに、子どもの精神科の問題だけは、なぜか全然減らない。これはどうしてだろうと。皆さん、どうしてだと思います？



図で考えてみることにします。中央の丸は子どもの心が健康に育っていくという、それを象徴している。健康に育っていくことの中心にあるのがこの青い丸で、それが何によって支えられているかというと、まず、子どもの発達の均衡と表記してありますが、子どもの心のバランスがとれていくようになるということです。

最近、発達障害とよく言われますけれども、全ての子どもは生まれたときは発達障害なんだろうと思っているんです。全ての子どもは衝動的ですし、全ての子どもは多動ですし、全ての子どもはこだわりが強いし、状況がわからない、空気読めない、コミュニケーションとれないです。その子どもたちがだんだんとバランスを取り戻していく、バランスをとれるようになっていくということが成長なんだろうと思うのです。子どもたちがだんだん発達障害ではなくなっていく、いいバランスの子どもになっていくということが、子どもの成長にほかならないと考えます。

では、子どもの発達のバランスを支えているものは何か。一番大きいのは、子どもが発達していく力なんですね。発達の潜在力、これは私たちの経験的には一番あてになります。そして、子ども自身が変わっていくその姿において、それを支えていくものが大きく2つあります。

一つは、養育の心理的安定、家庭が安定していることです。つまり、親が親として居続けてあげること。時にはひとり親のお宅とか、養育がうまくいかな

い子どもたちもいるわけですが、親の機能をする、養育者として育てる人がいてあげる。これが発達の根っこ、一番足元をつくるのに大事なのです。それが子どもの発達を促す。

もう一つは、自尊心の育ち、子どもが自分に自尊心を持って、自分っていいものなんだ、自分らしいというのはいいことなんだと感ぜられることです。自尊心の下に自他受容性とありますが、これは私が勝手にそう呼んでいるだけなのですが、自分のことも好きだけれども、自分のそばにいる人のことも好き。自分のことを大事だと思うけれども、自分と一緒にいる人たちのことも大事だと思えるというのが、私がいう自尊心なのです。

なぜこのように思うのか簡単に説明しますと、私たちが自尊心を持って自己肯定ができるというのは、自分の嫌なところも受け入れられるからなのです。皆さん、自分のことを振り返って、いいところだけでできている人っていないでしょう。自分の嫌なところもあるんです。そういう部分を含めて、自分で何とかやっていく、自分ってそんなに悪くないと思えば、自分の嫌なところも受け入れ、そういうところも合わせて、全体としてうまくやれているように思えるわけです。そういう気持ちがないと、人の嫌なところって絶対受け付けられないですね。人の中にはもっと嫌なところいっぱいあるんですから。嫌いなところ、嫌なところあるけれども、自分にもあるしお互いさまだから一緒にやっていけるということになります。

逆に言うと、自尊心が下がってしまうときというのは、自分の嫌なところが徹底的に嫌になるときなんです。何で私ってこういう嫌なやつなんだろう、もう周りの人たち、みんな私のこと嫌いに決まっていると思うと、気持ちがどんどん下がっていく。これが自尊心が下がった状態です。そういうときに、よその人や自分のパートナー、あるいは自分の子どもの嫌なところが受け入れられるかという、これは無理なんですね。人の嫌なことはもっと嫌に、一緒にやっていくのも嫌になります。自尊心が育っていくということは、自分も他人も受容をできるようになるということ。子ども

がバランスをとり育っていく、そういうふうになっていきたいと思う、あるいは、そういう人たちに受け入れてもらうというのが、周りの子どもたち全体が自尊心を持ちながら育っていけるというのが子どものバランスをもう一方で支えている、これでバランスをとっているのです。

実はこれらの家庭環境や子どもたちの自尊心はいずれも今、なかなか怪しくなっているのです。自尊心については、国際比較をしても、日本の子どもたちの自尊心はかなり低いというデータがあります。例えばいじめがあるとかというのは、子どもたちの間で自尊心の低さのあらわれだと思うんです。自分たちとは異質な子を見つけて、それを排除するわけです。それによって自分たちの崩れそうな自尊心を補強しようします。私たち大丈夫だよ、この子みたいに弱くないからと。外された子どもは自尊心が下がっちゃいますから、今度はもっとはずれた子を探すわけです。そうすると私は大丈夫になる、そういう自尊心の足の引っ張り合いをするのがいじめの構造です。

子どもの発達のバランスを保障する、子どもたちの間の自尊心も家庭の養育環境もなかなか難しい状況に置かれてきている。それでは家庭が悪いのか、周りの子どもたちが悪いのか。それはそうじゃないと僕は思っています。さらに、それを支えるコミュニティ、子どもを大事にする人たちがいて、これが実は、子どもたちの自尊心もご家庭も支えているのだと思うのです。

つまり、人間の子どものというのは、コミュニティの中じゃないと生きられないのです。産まれてすぐから人間の子どものは周りの人たちを経験する。ほかの哺乳類はそんなことないです。人間の子どものは、産まれたときそもそも取り上げるのはお母さんじゃなくて助産師さんだったりする。すぐお母さんと一緒に顔出すのはお父さんだったり、おばあちゃんだったりする。おうちに帰ってきたら、たちまち保健師さんがやってくる、近所のおばちゃんは「あら、かわいい赤ちゃんね」って言って寄ってくる、そういう中で子ど

もは育つのです。最初の1年間、周りの人たちが絶えずいろんな人を集中的に経験することで、人間の頭はこういう多様に、いろんな育ちをするのだと思うのです。それは実は、最初から子どもたちに、家族だけじゃなく、親だけじゃなく、地域の人たち、それから、子どもたちの育ちを守る人たちがいて、それが安定して環境をつくる、そういう仕組みを持っている。本来は、こういうものが1つの輪になり子どもたちの育ちの力も含めて、心の育ちを支えていたら、これが1つの理想的な姿なんです。

ただ、今こういう私の話を聞いていても、何かちょっとぴんとこない人が多いと思うのです。あまりリアリティがない。実は今、この循環はあまりうまく機能しなくなっていると考えられます。それで困っていることって何かというと、子どもの心のバランスがとりにくくなっているのです。その背景として、家庭の養育環境が不安定になり、もう一つの原因として、子どもたちが自尊心を持って、自分で OK と思って育っていくことが難しくなっている。その結果として、自分もほかの子どもも受容することが難しくなる。心がだんだん狭くなっているわけです。こんな状況で子どもたちが大人になっていこうとしている。

では、大人の世界って子どもたちみたいにいじめがないかという、そうじゃないですよ。大人たちも結構いじめに満ちた世界で生きている。ネットの世界で見れば、誹謗中傷とかヘイトクライムとか、ヘイトスピーチとか、何か自分とちょっと違う人たちを徹底的に蹴落とすような、不寛容な状況がいろいろな時代背景とともに見える。そういうところしか大人は子どもたちに見せられていないのです。それが、子育ちを支えきれないコミュニティをつくっていて、コミュニティは、実は子どもの育ちにあまり関心を持っていないということ。もちろんみんながみんなではないですが、子どもたちにとって大事なことが、第一が少なくとも子どもではなくなっているのではないかなと思います。

あとは、子どもたちの困った現象として、ネット中毒、ゲーム中毒が、精神科の診断基準に加えられ

るくらい深刻な問題になっています。ただ、子どもたちの言い分を代弁すれば、「ネットやゲームをつくったのは大人でしょ？ こんなおもしろいものをつくっておいて、物の見事にはまったら、はまった俺らが悪いって言われるのはどうなの？」ってきつと思うのです。要は、全く子どもの心のことを考えていないんですよ。便利でおもしろいものをつくれればいい、自分たちがつくらなければ人が先につくっちゃうだろうという考えだけでつくる、提供する。そうすると、案の定、みんながみんなじゃないけど、それにはまっちゃって、出られなくなって困る子が出てくるわけですよ。それは一体誰のせいですかという問題ですよ。きっと、それは、子どもたちは大人のせいだって言うに違いなくて、それはなぜ大人側の問題かという、大人たちが子どもの心の発達、心の成長をしたときに、あまり本気で関心を持ってないからだと思うんです。

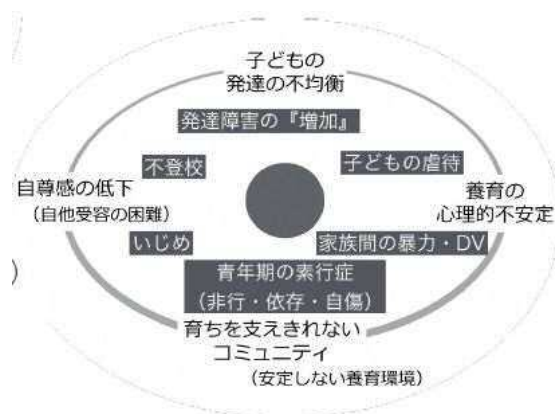
先ほどのいい循環ではなく悪循環が続いていると、この悪循環の結果として私たちの目に見えてくるものは何かということなんです。まず、子どもの発達の不均衡、つまり発達障害の増加という現象が見えてくることになります。先ほどお話ししたように、全ての子どもの発達がばらばらで発達障害に相当するような子どもたちで、その子どもたちが上手に発達を取り戻していくのが成長だとすると、成長を支えてもらわないと、当然ながらアンバランスなまま取り残される子どもたちが増えてくるわけです。だから、周りから見たら発達障害が増えたように見えることになります。

子どもたちが自分なりのバランスを保ちながら自尊心を持って育っていく、自尊心を持ってというのは、いろんなバランスの子ども自分の居場所があるということです。それがあって初めてバランスの回復なのに、その居場所が見つからないと、集団不適應、学校生活への不適應、不適應感がずっと続けば不登校が、当然の結果として起こることになります。そして、発達バランスの悪い子どもたちは、もうほとんど例外ないと言っていいぐらいいじめの対象

になるんです。行き場をなくした子どもが、いじめの結果として死を選ぶみたいなのが起きます。何でいじめぐらいで死のうとするのだらうと私たち大人は思いますけど、子どもにとってはそのくらい深刻な問題なんです。自分の居場所をなくすということは、自分がどこにも受け入れてもらえないということです。もう生きていても意味がないと思うぐらい、自尊心が徹底的に傷ついたときに、人は死を思う。自分の生きている意味にかかわることなので思うわけです。

そうやって自分の育ちを支えてこられなかった子どもたちが、大人になっていくときに社会とどういうかわりを持つか、大人の世界にアピールしようと思ったときに出てくる現象が、素行症、いわゆる非行です。自分たちを支えてくれなかった社会を見返してやろうと思うときに子どもたちがやるのが、この社会の枠に外れていくということなのです。昔の子どもはもっとパワーがあったので、外れ方というものなかなかダイナミックでしたけれども、だんだんそういう暴力的な集団化した犯行というものは見えなくなってきました。そこまでのパワーを子どもたちが蓄えていない、もっと個人化して内にこもったやり方で枠から外れていく。それが今の素行症です。ネット上の非行、自傷行為、あるいは、違法ドラッグとかお薬での依存みたいなことです。子どもがどんどん自分を攻めるようなやり方で、自分ってほんとうに必要なものという問いかけをするのです。自分ってほんとうに生きていて意味あるの、こういう自分を受け入れてくれるコミュニティってあるのという問いかけをするわけです。それに大人はなかなか答えられない。それが育ちを支えきれないコミュニティというところの象徴的な出来事だと思います。

それから、家のコミュニティはやはり個々の家庭というのをうまく支えていないですから、その家庭の中で起こる家族間の行為、家庭内での暴力や、DVなどを吸収できない。そしてそこに子どもの育ちの問題がかかわってくると何が起こるかという、子どもの虐待が起こるのです。

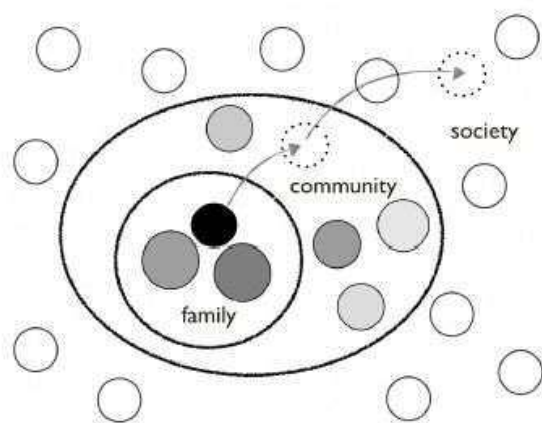


そしてここに見えてきた一連の現象こそ、児童精神科が一生懸命やっても減らないことの全て、つまり、子どもの心の問題の全体像であることが見えてくるのです。

子どもたちの心の問題が何で減らないかというと、背景にあるこういう問題でつながっているからなのです。出てきた現象にだけ僕らが焦点を当てて、やれ不登校だとか、やれいじめだとか、やれ子どもの虐待だとかということの対策をやっている、減るはずがない。地下茎でつながっているスギナみたいなものですから、芽を出したところだけ摘んでも減るはずがないんです。見えてきたことではなくて、私たちは深いところの問題を扱っていかないと、子どもの育ちを支えていくことができないんじゃないかなと思います。そのときにもう一回、私たちができると、コミュニティとして何ができるか、ほとんどコミュニティというのが、子どもの育ちにどんな意味を持っているのかということを考え直してみたいのです。

もともと人間は何万年も歴史があって、その歴史の中ではコミュニティをつくって、大体100人とか200人とかぐらいの単位のコミュニティで生活をしてきた。村落、集団をつくり、一緒に狩猟や漁業や農耕をして、コミュニティ同士で物々交換して生きてきたという歴史がずっと長いのです。人間はそれから先、文明が進化して何が起こったかというと、社会の形成です。社会って100人、200人のコミュニティじゃなくて、何万人、何億人という、知らない人たちに囲まれて暮らしている、そういう時代になってきたわけです。しかし、一歩家を出たら、そこは知らな

い人ばかりでは、人間って生きにくいんです。生きにくいので仲間をつくる、知り合いをつくるということをした。これは今の時代のコミュニティですね。こんな感じです。



そのコミュニティの中で、ある2人が知り合って家庭をつくる。人間はそういう面倒なことをするのです。つまり、子どもが産まれる前、子ども抜きにして家庭、生活そのものがあるということをするのは人間だけです。何でそんなに面倒くさいことをするか、それは、ここに産まれた子どもが社会に出ていくために必要だからです。いきなり社会では生活ができないのです。

家庭の大きな役割というのは、子どもを社会に送り出すことなんです。社会の中で自立をするって、それだけ難しい。難しいことをやるのに、まずそのベースである家庭をつくる。家庭の中で大事にされるという経験をする。ただ、大事にされただけでは子どもは自立できないんです。なぜかという、社会に行けば、自分の知り合いがいない、自分の居場所がないというところにいる力は家庭の中でなきゃつくることができないのです。社会に出ていくための社会性だとか、社交性だとか、忍耐力だとかという部分が身につくかという、無理なんです。

なので、人間はどういうことをするかという、この家庭から1回コミュニティに出ていきます。そのときのコミュニティというのは、自分たちのことをよく知っている人、この子どもの育ちを支えてくれる人たち

のことで。そこでの居場所がみつかって生活ができると、先の社会に出ていくことをきっとしていたに違いない。こういうルートじゃないと人間の子どもの社会化ができないのです。

地域コミュニティを例に考えたとき、例えばお母さんにお買い物に行ってもらい、そのうちに自分でお使いに行けるようになる。お使いに行くのもそんなに遠いところじゃなくて、ご近所の八百屋さん、近所の魚屋さんに行くと、そこではいつも顔なじみの八百屋のおばちゃん、魚屋のお兄ちゃんがいて、「よく来たね。今日は1人なのか」って言って、お買物を手助けしてもらうという、それから先の取引の原点になるような経験を、地域でやっている。地域に遊びに行けば普通に公園があって、友達がいて、「遊ぼうね」って、知らない子もいるのだけれど、その辺も含めて遊びが成り立っている、そういう経験をしていく。それができて初めて、知らない人の中でどうやって振る舞ったらいいかということがわかってくる。何か悪さをしていると、よそのうちの子でも平気で叱っちゃうおばちゃんとかがいて、「僕たちそんなところで遊んでたら危ないよ」って守られている経験をしている。そういう力をつけて社会化するわけです。

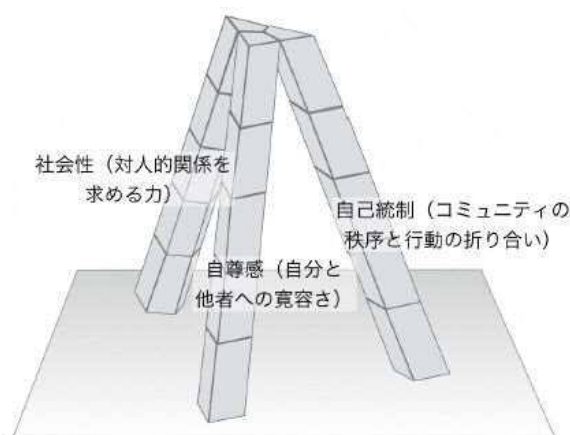
ただ、今の時代、地域のコミュニティがそこまでの力を持っているかというと、これはすごく怪しい、そこまで人の子どもの育ちに干渉ができるか、関心が持てるか、それはすごく曖昧な状況になっている。システムとしても、お買い物に行って買い物の仕方を教わるということが可能かという、スーパーで買い物したり、コンビニで買い物したり、ネットで買い物したり、どれもほとんど直接言葉を交わさなくても買い物ができちゃう。そういう社会性を身につける必要がない状況があります。公園に遊びに行って誰かと群れて遊ぶ、初めての子ども巻き込むみたいなことができるかと、できないですよ。公園に行ったら誰も遊んでないわけです。つまり、地域コミュニティが2段階で子どもが地域の中で社会に出ていくという、真ん中の役割を果たさなくなっちゃっ

たわけです。これの同じようなことは、例えば、子どもにとっての親族コミュニティとか、お父さんなんかのお仕事を介した職業コミュニティみたいな、それぞれ意味合いがあったわけですが、そうしたものがことごとく失われているというのが現状なのです。

そして最後に残ったコミュニティは何かというと、学校コミュニティです。学校で生きている道を選ぶことを見つけて、100人とか200人とかという、知っている子どもたち、先生たちの仲間に囲まれながら社会に出ていく力をつけていくと、この図式はあまり変わらないのですけれども、多分現在の学校というのは、先生と子どもにとって窮屈にできている。何が窮屈かって、みんなで同じ勉強の仕方、同じ方向を一斉にやらなきゃいけないからです。

日本人の国民性にとって、それは妙にマッチしたところがあり、みんなで同じ制服を着て、一心不乱に行動するというのは美しいなと思ったりするメンタリティがあるのです。あるのだけれども、それが合わない子どもたちというのも当然いるわけです。今みんなが学校に行く中で、「俺そういう嫌いだから」って言えるかって、なかなか言えない。無理して合わせる、無理して合わせると気持ちが疲れちゃう、なかなかそこに自分の居場所が見つけられなくなる、子どもによっては不登校になっていくということ、これは当然起こるわけです。そして不登校が起こったときに、誰が困るんだろうって考えると、学力だったらほかのつけ方は幾らでもある、友達をつくるのだって、別に学校でつくらなくてもいい、でも困っちゃうのは2段飛びをして、社会に出ていくルートが見えなくなっちゃうことなのです。すると誰が困るかという、子ども自身よりも親とかあるいは、育ちを支えている人たちとか、学校システムも困っちゃう。だから、学校はどんなに何か居心地が悪くても来てほしい。そういう状況が生まれているだろうと思うわけです。

■ 自立と依存



これは、私が毎回のように使う絵なので、どこかで私と一緒に勉強会をやっている人は見たことあるかもしれませんが、子どもの自立、いわゆる人の自立というのは3本の柱で支えられているところを表したものです。この3本の柱が順調に立ち上がっていく、積み上がっていくことが心の成長なんだというのが私の考え方です。

その3本は何かというと、まず1本は社会性です。社会性って何かというと、人とつながろうとしていく力、人の仲間に入っていきたい、みんながやっていることを自分もやってみたいと思うこと、何か誰かと親しくなってみたいと思うことです。このみんなの間に入っていきたいと思う気持ちの一番ベースのところでは、自分にとって新しい人と接する、新しい人と触れ合うのはいいことだという、そういう気持ちがなきゃいけない。これを与えてくれるのが家庭生活です。

それから、もう一つの柱、自己統制と書いてありますが、自分をコントロールする力のことです。我慢はしなきゃいけないところは我慢する、あるところではやりたくないことをやる、これがセルフコントロールです。そう考えますと、例えば小さいときだと、お母さんのしつけを受けるみたいなこと、ほんとうは食べたくないけれど離乳食を食べなきゃいけない、ほんとうはまだ存分に遊びたいけど、表に出ると子どもがいっぱい寄ってくるのに、静かにしてなきゃいけないみたいなことがある。そういうさまざまをどうや

って学んでいくかという、親子のやりとりなのです。親子のやりとりがないと、例えば、お母さんがいつもと違う表情をする、これは何かやらなきゃいけないことがある、自分って何かしてかしたのかなということ、関係の中で察していくわけです。これがだんだん広がっていき、今度はお母さんじゃなくておばあちゃんのところに行ったら、自分は何をしいのか、お友達と一緒に保育園に行ったらどんなことがある、どんなルールで生活をしなきゃいけないのかみたいなことを一つ一つ積み上げていく。つまり、これは何かという、コミュニティの秩序と行動の折り合いなのです。自分がやりたいことがある、でもいつも自分のやりたいことだけやっているわけにはいかない。自分を取り巻いている人たちと折り合いをつけなきゃいけない。保育園に行ったら保育園のルールと折り合いつけなきゃいけない。小学校に上がった、小学校のルールだけでなく、人との約束をする、友達と約束をしちゃった、ほんとうはおうちでテレビ見たかったのに明日遊ぼうねって約束しちゃった、友達との約束を守らなきゃいけないというのが折り合いです。自分の衝動と友達との約束、明日までに宿題をやっておいでねという担任の先生との約束を自分も守っていかなきゃいけない。あるいは、自分は将来これになろうと思って頑張るって気持ちを決めた、すると、時々は何かもう勉強が嫌になっちゃうことはあるんだけど、でも勉強を続けていく、これは意思の問題です。その中で、自分と、それから自分で約束した自分はこれをやりたいですという自分の目標との折り合いです。そんなふうにして力を積んでいくのです。これが、実は子どもの忍耐力とか周りへの適応を支えているんだろうと思うのです。

そういったものを支えている背後の一番大事な柱だと思うのが、自尊心です。子どもたちが自分で大丈夫、自分らしいっていいことだなと思ながら育っていけるか。これは、ほんとうに小さい子どもの時代から大きくなるまですごく大事なのです。自立をした後でもこの自尊心が支えになってくれる。こ

の自尊心の支えがないと、自分が存在する意味を感じないということです、鬱になってしまう。

この3つの柱のどれが欠けてもだめで、こういう課題を一から積み上げていくことで、最終的に、自分の力でコミュニティとかかわれるようになっていく。そのことが大事です。共存が不可能になったときに孤独、孤立とか、ひきこもりとかいうものになってくるわけですが、その問題とどんなふうにかかわっていくかということを考えます。

■自尊心と共存(自他の多様性への寛容)

子どもたちは、自分の意味を自分でうまくつかめない。どうしてかという、自分で自分を選んでいないからです。子どもは自分で自分の名前をつけたりしません。それから、男であるのか女であるのかということを自分で選んでいません。自分で選んで生まれてきたわけじゃない。自分の性格も、自分の能力も、別にこうやって産んでほしくて生まれてきたわけじゃないんです。それが子どもの特徴です。

ただ、大人になるということは、選んでいないけど、この自分でやっていくということに腹をくくることができないけど自分でやっていく。やりたくないけども、例えば人前に出たら自分の特性、女、男で、こんな能力で、こんな声でとか、自分で責任を持たないといけません。大人としてやっていくということは、この自分について自分で責任を持つこと、選んでない自分を選び直していることなのです。この自分を背負って大人になって出て行くときに大事なことは、自分を肯定することです。嫌なところもあるんですよ。嫌なところもあるけど、まあ、この自分で何とかやっていけるなと思ったときに、初めてその人は自立ができる。自分の責任が持てる、自分を選び直すことができるということがあるのですね。

今お話した自立課題の一番大事なことは、自分のあり方、自分の全体として嫌なところも含めて、自分を全部気に入っているわけじゃないけど、けれども、この自分でやっていく。つまり、自分のあり方を受容できるかどうかということなのです。では、自分であ

ることを受け入れるのに必要なこととは何か。どうしても嫌なことも含めて自分というのを受け入れることができるか。そのために周りがどう力を貸してあげられるだろうかということを考える。

一方では、実際に受け入れ切れない人たちというのは、自分のことが嫌いでしょうがなく、自分のことが嫌いだから自分を傷つけたり大人に反抗したりする。そういう人たちが自分の母親だったりに何て言うかという、何で私を産んだんだ。こうやって育てた責任とりなさいよみたいな迫り方をする。親としては返す言葉がない。なぜなら別に子どもがこういうふうに生まれてほしいと言ったわけじゃないからです。親が産んだというある種、引け目、負い目みたいなものがありますから、どうしても親はそれを言われるとうまく対応できないみたいな関係になっていってしまうというすごく難しい状況というのが、しばしばあります。そのことの一番根本は何かというと、自分のありのままを受け入れるという状態なのだろうと僕は思うのです。そうすると、自分が周りを受け入れて、周りとかかわっていくことが難しくなっていく。そこにひきこもりという状況が生まれてくるとしたら、ひきこもりにどうやって対処するかということよりも、もう一回、beingって何か、beingを手当てするにはどうしたらいいか、周りのコミュニティがbeingの問題に対してどういう向き合い方をするかということを考えていくほうが、遠いようで実は近いというふうに考えるのです。

■自分らしさとbeing

あらためて、beingとは何かということをお話しますと、意味としては、ほかの誰でもないその人であるということ。けんちゃんのbeingは、けんちゃんは誰でもないそのままだけんちゃんだ。子どもなら誰でもいいわけではなくて、その子じゃなきゃだめということです。お母さんのbeingと言うと、自分にとって優しくしてくれる人だったら誰でもいいわけではなくて、このお母さんじゃなきゃだめなんだということ、これがbeingです。それが具体的に何を意味するか、

どんなあらわれ方をするかという、その人らしいあり方とか感じ方とか考え方とかです。ただ、そのあり方とかっていうあまり動かないものだけではなくて、そのときの気分とかやる気とか、そのときの対人関係とかいうことも含めて、常にdoingの背景にあって見えないもののことなのです。

僕の経験上、子どものdoing、子どものやることには、必ずbeingの背景があります。子どもの心の病気という、大抵、子どものdoingが問題にされるんですよ。学校に行けませんとか、暴れますとか、こだわりが強いですとか、自分のわがママがとまりませんとかっていう、みんなdoingです。でも子どもが何かをする時、そこには必ず意味がある、つまり、beingがある。でも、往々にしてbeingのところを無視してdoingの対策だけ考える。だから、学校に行けないというdoingの問題があれば、それは必ず何かしらのbeingの問題を含んでいます。必ずbeingの背景があります。もしかしたら、いじめられたかもしれない。もしかしたら、学校がどうしても合わない子がいるかもしれない。先生のことが好きになれないかもしれない。おうちとかお母さんのことが心配でおうちを離れられないかもしれない。みんな違うわけです。ところが、不登校対策というときに何を考えるかという、beingの問題に目を向けるのではなくて、doingの問題に目を向ける。どうやったら子どもが学校に戻れるかとか、子どものdoingに対する私たち大人もdoingを考える。もしかすると、その結果として子どもは学校に戻れるかもしれない。でも、そのときのbeingの問題ってどうなってしまうのですか。これについて誰も手を触れないということが往々にして起こるのです。誰も手を触れてこなかったら、子どものbeingは間違いなく傷つくのです。誰も自分のほんとうの気持ちをわかってくれないけれど、自分を学校には行かせようと思うわけです。beingとはそういうもので、常にdoingの背景にあって、ほんとうは私たちが一番目を向けなきゃいけないのだけれども、そもそも私たちの中にbeingという発想があまりない。beingを大事にして、子どもを育てる

という発想がないのです。というところに問題がある。

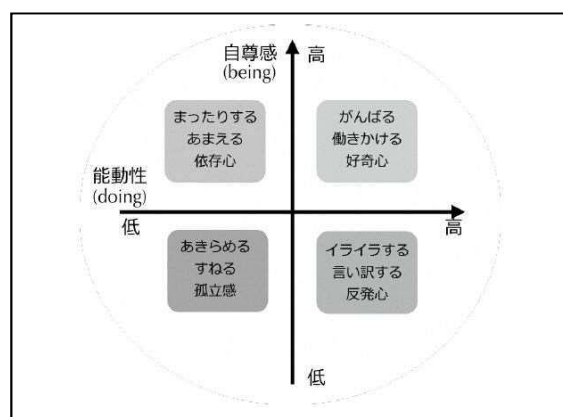
もう一つ言うと、いいbeingが大事で、子どもが自分は自分でよかったなと思える。自分が自分に意味がある、自分らしさに意味があると思えるか、これがいいbeingなのですが、それを維持するためにどうしていくかです。いいbeingを維持するというのはなかなか難しい。そして、よいbeingを維持するためには他者とのかかわりが絶対に必要なのです。周りの人が自分を大事にしてくれるという経験があって初めて、自分はいい、自分で大丈夫、自分でやっていけるというふうに思える。そうすると、先ほどのお話に戻りますが、子どもをどういうコミュニティが支えていて、周りの大人たちみんなが私のことを大事にしてくれるという感覚が大事なのではないだろうかと思います。

私たちの子どもに対する見方にbeingという視点を持ち込んだらいいのですが、僕らが子どもを見るときに持てない視点なのです。なぜかというと、私たち自身もbeingじゃなくてdoing中心で動いているからです。子どもを受け入れるときにdoing中心で見るので、見えてこないのです。ただ、それを見ないとわからないことがどうもいっぱいある。1つは、養育。子どもを育てるというのは、あるいは逆に子どもが育つというのは、beingの継承なんだと言うことです。これを言ったのは、イギリスのウィニコットという人なんですけれども、彼は子どもがbeingを受け継ぐという、その議論をしているときに、主に母子環境を見ているのですね。お母さんが全人的にいてあげることによって、子どもがいてもいいという感覚を受け継ぐ。でも僕はそれだけではないのではないかと思います。つまり、母子間だけではなくて、コミュニティとの関係も継承をする。子どもがいいbeingを受けとれるというのは、自分を取り巻いているコミュニティからもらう、つまり、コミュニティがいいbeingを持っていれば、子どもはいいbeingを受けとることができるという側面もあるはずです。それで、自分もいいbeingをつくって、いいbeingを持った子ども

もをつくることできる。こういう世代間の伝承です。次の世代に受け渡していくことが、コミュニティとの関係においても継承していくのではないかなと。ということは、コミュニティがいいbeingを持てない、持てていないということは、この伝承がうまくいっていないということの意味していることになります。何でそれがうまくいかないかというと、doing偏重の社会状況がbeingの成熟を困難にしているからです。私たちの社会はbeing中心なんです。doing偏重ということは、子どもをdoingではかる。

子どもにとっては親がいるということが価値です、特に初めの1年目がそうなんです。親にとっても、子どもが何をするかではなく、いるだけでいい。いるだけでいいというところに戻れるかどうか。それがbeingの価値なのですが、今の時代どうしても、子どもを育てるということは達成できるようにするということが得ないのです。それはしょうがないにしても、beingという要素があるということを忘れてしまうと子どものbeingは育たないのです。

最後に絵を1枚、この絵だけ印象に残ってくればいいのかと思う絵を差し上げて、この後のパネルの参加者の話にできたらつなげていきたいと思います。



マトリックスを書きましたけれども、縦軸が自尊感、横軸が能動性、アクティビティー。能動性というのは、どれだけ周りに対してアクティブであるか、どれだけ周りに働きかけられるか、どれだけ周りにつながれるか、そういうアクティブさ、能動的であるかということを考えてます。縦軸は自分がやっ

ているという。感覚です。言い換えれば、縦軸はbeing、横軸はdoingなんですけども、具体的な子どもの姿を思い浮かべていただけると少しわかりやすいかもしれません。

右上の部分はHigh(ハイ)-doing・High(ハイ)-beingの状態です。これを子どもらしいと思うことが私たちの気持ちです。すでに doing 中心になっている証拠です。頑張っている子ども、周囲に対して働きかける、ねえ、一緒にやろうよと言って周りにアクティブにかかわろうとする、自分の世界を広げられるという好奇心の子どもの姿です。僕らがこういう子どもを見れば、元気でいいね、子どもらしくていいねと思いますよね。思うのだけれども、これが子どもの心の動き全てではないのです。子どものbeingが下がっているとき。何かお手伝いをするとか、これをやってみたくとか、たまにはいたずらをしてみたい、だけれど、それがうまくいかない、いたずらが見つかった、お手伝いしても、そんな頼んでもいないことをしてみたいなことを言われちゃって、やり過ぎて怒られちゃう。楽しかったけれども、トラブルになっちゃう。そうすると自尊心が落ちこちる。自尊心が落ちこちて、でも、まだ自分は自己主張をしたというときは、いらいらしたり、言いわけしたり、反発したりする、そういう子どもたちの姿があるでしょう。それがこの右下の部分です。

doingも下がっちゃう。つまり、やれることがなくなって、周りとも積極的にかかわることをしなくなってしまう、そういう自分が嫌でしょうがない、うまくいかないことはわかっているんだけど、出口がなかなか見つからないというときの子どもはLow(ロー)-doing・Low(ロー)-beingなんです。すねちゃったり、いじけちゃったり、孤立したりして、何か頑張っても諦めちゃうみたい。それがこの左下の部分です。

問題はこの左上の部分です。ここに何があるか。この表のヒントをくれたのは、とある学校の校長先生ですけれども、その先生いわく、「田中先生ね、学校ってあまり子どもがまったりしている場面ってないんだよね。学校であまり子どもはまったりしているの

は好きじゃないんだよね」そうですよね。学校にまったりしている子どもはいないんです。のんびりしている子だとか、ゆったりしている子とか。まったりできているとき、doingは低いんですね。ちょっと今、何もしたくないと思っているんだけど、そのときの自分は全く悪くないと思っている状態です。

子どもの気持ちって実は振り子みたいなのがあります。何の振り子かといいますと、真ん中が年齢層で、こっち側が背伸びで、こっち側が甘えとかです。真ん中は年齢相応ですが、そこにいるのはほんの一瞬で、残りは背伸びをしているか甘えん坊をしている。子どもは背伸びをしようとすることで伸びていくのです。新しい世界を経験することができる。新しい世界に手を伸ばしていくことができる。子どもたちの自己主張って大体そこから始まるのです。1歳児ぐらいのときに、できもしないことを自分でやるんだって頑張って、手を貸すな、それが子どもの自己主張で背伸びです。でも、それがあつたので、子どもは1人で靴下を履けるようになる。1人でフォークを使ってご飯を食べられるようになる。1人で歩いていけることができるようになる。ただ、いつも背伸びしているかという、そうじゃない。背伸びしない時期が、つまり、やれるのにやらないことが幾らでもあるんです。大人は1回できたよね。だったらできるでしょ、と思います。でもできたのは背伸びしているからできたのです。背伸びらなくなっちゃうとできなくなる。子どもにとってはできるのもできないのも含めて本物です。

そうすると、頑張る、働きかける好奇心。実はこれが背伸び状態です。ということは、背伸びができないときがあり、High(ハイ)-doing・High(ハイ)-beingが維持できないとLow(ロー)-doingになっちゃうかもしれないし、Low(ロー)-beingになっちゃうかもしれない。学校がうまくいかなければいらいらするし、言いわけするし、いじけちゃうし。ただ、さっきの振り子の振れが上手にできるためには、振り子が新しいエネルギーをもらわないと先に行けないわけで、そのためにはdoingはひくくてもbeingは低くない状

態が必要なのです。

すると、学校というのはdoingの世界なんですね。つねに頑張ることに重さがある。そうすると子どもは右下の部分との間を揺れるしかないことになる。

どういうふうに子どもが自分を維持できるか必要なのはこのまったりの部分なんです。強制すれば子どもは嫌々でもそれをするけども、そのときにbeingが下がっちゃっていたら、それは子どもの力にはならない。子どもを自立させていくという力にならないということを僕らが考えてあげなきゃいけないわけです。今、世の中全体がdoing社会なので、doingさえ高ければいいと思ってしまっていて、子どもたち、青年たちのbeingのことはあまり考えなくなっている。コミュニティが、beingが大事。コミュニティのbeingも大事ですし、コミュニティを介して成長していく子どもたち、青年たちのbeingが大事という気持ちとどうか考え方が必要なんじゃないかと思うのです。

■おわりに

それぞれのあり方というのが大事と、どんなことが生まれてくるか、どんなことが言ってあげられるかみたいなことで、私の話を終わりにしようと思います。

こういう生き方もいいんじゃないかなと私たち大人から子どもたち、青年たちに伝えられるかということ。なかなか言ってあげにくい。例えば子どもたちが夕方、学校や仕事から帰ってきて、今日1日、何やってたの？ 今日休みだったので1日ゲームしてたとか、もうちょっとやることないの？ とつい怒っちゃう。でも、そのときに、そういう生き方もいいんじゃない？ と行ってあげられるか。つまり、まさに子どものbeingを否定することから始めない。でも、こんなこともできたらちょっと得だったよね。こんなこともできたよね。そのときに子どものbeingを肯定してから、子どものdoingについて一緒に考えていくことが初めてできるんじゃないかなと。青年たちについても同じことだろうし、それが私たち、子どもを取り巻くコミュニティや人間にとっても、いいものをつくっていくのではないかなと思います。

時間超過しちゃいましたが、私のお話を終わりにして、休憩を挟んでほかの先生たちの話を伺ってみたいと思います。どうもご静聴ありがとうございました。

◆パネルディスカッション

社会の変遷と若者たち

～これから私たちができること

《パネリスト》

■ 田中 哲 (児童精神科医)



■ 井出 草平 (社会学者)



■ 中塚 史行 (子ども若者ネットワーク代表)



《モデレーター》

河津 英彦 (元淑徳大学教授)



【河津】 みなさん、こんにちは。秋晴れで、すがすがしい日和ですけれども、おいでいただいて、大変ありがたく思っております。

今、田中先生からも being と doing を、我々は今まであることとすることみたいに考えていましたが、こういう言い方の表現もあるのだなと、改めて気づかされました。大変、視覚的にも訴えていただき、言語化するときにはどういう言葉で表現すれば今の子どもたちの状態をよく理解できるかという、そういうことを見せていただいたという感じがしました。

私自身は、もともと品川区の子ども・子育て会議の会長ということで、来年、第2期が始まりますけれども、5カ年計画をつくってきました。それ以前に、次世代育成支援対策推進地域協議会の会長を2004年からやっていました。

さらに、品川区青少年問題協議会のなかで、子ども・若者計画策定委員長をつとめました。

この計画の趣旨は、付属資料をご覧くださいとして、初めに、子ども・若者シンポジウムの「自分らしく生きる～孤独と共生を考える」というタイトル、本日のテーマについて申し上げます。「自分らしく生きる」ということで、孤独と共生を考えるという、この場合の「孤独」というのは、寂しいという意味の孤独も当然入んですけど、それだけではなくて、同時に、独立して生きていくという積極的な意味合いも二重に込めています。大変話題になりました、2018年1月のイギリスの孤独担当大臣。孤独担当大臣は、英語では Minister for Loneliness ですね。Loneliness を使っています。寂しさというほうの孤独ですね。英語で、もう1つは Solitude という言葉があります。それは、ソロ活動のソロですよ。みんなで合唱するのではなく、あるいはデュエットの部分で今日は独唱で歌いますというとソロですね。そういった、積極的な意味も含めて、孤独というものを考えてみよう。それから、共生ということは、障害者基本法で見ると、自立と社会参加がキーワードでした。そうすると、孤独を自立に置きかえて、共生を社会参加に置きかえると、障害者基本法の考え方とも重なってくる部分があるかと思います。さらに障害者基本法は、そ

の後改正をする中で、人間が相互に個性と人格を認め合って、これで共生する社会をつくっていかうという言葉が、もう、今は入ってきています。そういった流れが、一方ではあるということになると思う。

そういう意味を込めていますので、孤独と共生。自立というと、ちょっと冷たそうな感じがありますけれども、先ほど、田中先生からも、こういうふうに自立を考えたらというお話もありました。早速これから、あと2人の登壇者の方に20分ずつ、田中先生のお話も踏まえながら、ご意見を伺ってみたいと思います。

それでは、初めに、大阪からおいでいただいた井出先生、どうぞお願いいたします。

■パネリスト(井出氏)によるプレゼンテーション

【井出】 よろしくお願ひします。専門は社会学をやっております、今日、しゃべる内容は社会学よりも精神医学に近い内容かと思ひます。今日は臨床における問題の切り分けについて話してみたいと思ひます。問題の切り分けは、どのような対処をするかということを考える時に必要になる基本的な整理です。

いつもはひきこもりの話をする事が多いのですが、今日はひきこもりに限定した内容ではなく、不登校、就職の困難を抱えていたり、友達となじめなかったりする若者全般の話ということなので、話は多岐にわたります。一つ一つ具体例は出していくのですが、それらの例は問題に限定した話ではなく、若者の困難全体を通した問題が通底していると捉えてもらえるとありがたいです。ちょっと抽象的になるところはあるかなとは思ひますが。

問題を整理することが解決の第一歩

- 問題を整理することで必要な資源、アプローチが見つけれられる。
- 整理の失敗例
 - ひきこもりや不登校の子どもは病気ではない。
 - うつ病でひきこもり状態なのはひきこもりではない。
 - ひきこもりは精神疾患ではないので医療を受けなくてもよい。
- 問題の整理をしないと相談先やアプローチを間違ひう可能性がある。

まず、整理をすることが問題に相対するときの第一

歩です。整理をするというのは結構重要な作業です。学術的に整理をするという意味も含みますがそれだけではありません。臨床をする上でも、支援をする上でも、行政が施策を考えている上でも、整理は非常に重要です。ひきこもり支援では、整理ができていないために今までさまざまな失敗があります。例えば、うつ病でひきこもり状態なのは、ひきこもりではないというような考え方ですね。これも整理の失敗です。ひきこもりは精神疾患ではない。まあ、確かに精神疾患には入らない。だからといって医療を受けなくてもいいとはならないのです。これはひきこもりでの一例ですが、若年の問題全般で整理の失敗が起こっていると思ひています。

この問題の整理をしないと、相談先というか、臨床家へのアプローチというのを間違ひしてしまうかもしれないので少し整理していきましょうという、そういう話です。

アセスメントの方法を間違ひない

- 1軸： 精神科疾患
- 2軸： パーソナリティ障害
- 3軸： 身体疾患
- 4軸： 心理社会的環境
- 5軸： 社会的・職業的機能

アメリカ精神医学会
DSM-IV

1軸： うつ病、4軸： 貧困、5軸： 不登校

1軸： なし、5軸： ひきこもり

→ ひきこもりだから精神医療は不要とは限らない。

このスライドで示した「多軸診断」というのはアメリカの精神学会の診断基準で、2014年まで使われていた DSM-IV の区分です。2015年からはいろいろなものを評価するのではなくて、精神疾患だけ評価していきましょうということになった。精神医学では総合的な評価をしなくなったのですが、実際の臨床、支援ではこの区分というのは非常に優秀です。

1軸と呼ばれるのが精神科疾患で、いわゆる精神疾患ですね。うつ病であったりとか、不安症だったりとか、統合失調症だったりするのは全て1軸に入っています。2軸というのが、パーソナリティの問題です。3軸目が身体疾患。4軸目が心理・社会的環境。5軸目が社会的・職業的機能。これは学校に行っているかど

うか、職場に行っているかどうかが一つの評価軸になります。これが職業的機能となですね。社会的というのはコミュニケーションをとっているかどうかです。友人とか、職場の同僚とかとコミュニケーションをとっているかどうかです。この社会的・職業的機能の評価が5軸です。社会的職業的機能が落ちている状態は、ニート、ひきこもり、不登校に該当します。

例として出しているのは、1軸がうつ病、3は特になくて、4の心理社会的環境は貧困だと書いてあります。うつ病で貧困である。それから5軸目は不登校です。家庭に不登校のお子さんがいるとします。ごちゃごちゃとした問題をそのままにして支援をしても、あまりうまくいきません。精神疾患があるなら精神疾患の治療をしなくてははいけません。社会的な環境、ここでは貧困ですね。子どもの貧困の問題があれば、福祉的な支援が必要なので福祉課など行政への相談が必要になってきます。生活の問題があれば、必ず精神医学的な問題があるとは限りません。1軸の精神疾患がなくて5軸ひきこもりだけであるという人もいます。ですから、うつ病などの精神疾患とひきこもりは重なることがある。どちらか一方からカテゴライズされるものではない。ひきこもりだからといって必ず精神疾患があるわけではない。ひきこもりの5軸と、精神疾患の1軸は別々に評価すると問題がかなりクリアになります。この整理を失敗すると、ひきこもりは精神疾患じゃないから、精神科に行かない。その結果、精神疾患が長期化してなかなかひきこもりが治らないといったケースが非常に多くあります。この5軸に分けて、問題を抱えている人の状態を整理していくとどういった対処が必要なのか分かりやすくなります。

各軸への介入・仕掛けが必要

- 伝統的には1軸を治療すると人間は学校に行ったり、仕事に行くと考えられていた。
- 周囲の社会適応圧力や本人の「働かなきゃ」といった思いの強さ。
- 1軸の治療をしても社会に戻らない、戻れないケースは少なくない。単純な医療問題として捉えると直らない場合がある。
- 5軸は5軸への介入が必要。社会に戻る仕掛けは1軸の治療とは別に必要。

ひきこもりに関わっていると、私たちの常識も修正する箇所があることに気づかされます。伝統的には、1軸、つまり精神疾患を治療すると、人間は学校に行ったり仕事に行くと考えられていました。これは、病気を直したら働きだすだろう、という思い込みはいまだに根強くあります。身体的な疾患の場合は、精神ほど難しくないので。例えば、スキーに行って足の骨を折ってしまった場合、病院にいてギブスをはめて松葉杖をもらって動けるようになったらある程度復職できるし、松葉づえが必要なくなれば、ほとんど元通り働けるようになるでしょう。これは、本人の働く気と働く用意がもともとあって、ケガが治ればすぐに働けるためです。

精神の場合は、これほどシンプルではありません。病気が治れば働けそうに感じられますが、さきほどもちらっと言ったように、本人に働く気と働く準備ができている必要があります。ほとんどのひきこもりの人は働く気はあります。学齢期であれば学校に行きたいと言います。しかし、働く準備ができていないことがあるんですね。働きたいけど、働けない、といった状態です。

1軸と5軸の話でいうと、1軸は1軸の対応をしないといけない。5軸は5軸の対応が必要です。つまり、社会に戻る仕掛けというものがないと、病気が治ったからといって、人間は意外に社会に戻っていかないものなんです。そのため、不登校やひきこもりは支援が難しいとされているのです。これが、不登校やひきこもりの支援が抱えている問題です。

思春期・青年期は発達を味方につける

- ・思春期・青年期は成人期とは異なり発達の要素が加わる。
- ・発達の方向付けを上手に整えると無理なく社会復帰ができるが、調整できないと社会復帰が難しい。
- ・精神病理への介入をするよりも、本人の発達の環境を整えるアプローチが精神病理を回復させることもある。→ 例：拒食症へのアプローチFBT

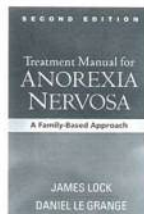
今回は、若い人の困難の問題なので、「発達」について触れておこうと思います。成人もちろん発達していきますし、進歩もしていくのですが、思春期以降の発達と比べて、スピードだとか質の面ではかなり違います。発達の方向づけを失敗すると、社会復帰が難しかったり、精神疾患が治らなかったりするのですが、逆に上手に整えられると、無理なく社会復帰ができる傾向にあります。発達という観点はやはり成人と若年との大きな違いなのではないかと思います。

思春期の拒食症のための家族療法(FBT)

ジェームズ・ロックらによって開発。2/3が治る。条件は 家族同居・18歳以下。

1. 食事セラピー
2. 体重に焦点化
(精神病理には焦点をあてない)

精神病理への介入をして治療をするという考え方をしない。本人の人間関係の発達の中で精神病理が自然に改善する。発達を味方につける。



精神疾患の治療というと、大まかには、投薬か精神病理の介入をすることになります。ここでは、摂食障害を例にとりましょう。心理療法もしくは精神療法と呼ばれるカウンセリング技法にもいくつか有効な方法がありますが、最近注目されているのは「思春期の拒食症のための家族療法」です。略してFBTと呼びます。思春期の拒食症の家族療法は昔からあるのですが、近年、ジェームズ・ロックという医師が発展させたアプローチが興味深い。治療成績で3分の2程度が治るという結果が出ており、今までの治療法より格段に良い成績を残しています。

FBT の条件は、家族同居であり、18歳以下であるという点で、摂食障害といっても、食べないタイプの拒

食症です。18歳以下というのは、もともとアメリカのアプローチですので、アメリカの制度との関係があります。アメリカは18歳になると大学に行きますが、多くの学生は親元から出て、ハウスシェアとかルームシェアなどで大学の近くに友達と住んだりします。親元にいる間に拒食症を治すという方法なので、18歳という制限がついています。

このFBTの興味深いところは焦点を体重に絞るところです。体重が摂食障害の中心的病理かというところは違いますが、体重にわざわざ焦点化ところがFBTの優れているところ。精神病理には触れずに、思春期の「発達」を原動力に精神病理を直していこうという発想があります。

治療過程を簡単に言いますと、家族を治療の主体にすることです。最初にするのは、父親・母親に来院してもらい、食事セラピーをすることです。家族が治療の主体になり、発達をうまく方向付け、学校や友達との関係性の中で成長してくと、摂食障害が治る、というのが、このセラピーの特徴です。

発達の方向付け(例)

家でひきこもりで孤立

仲間集団等での発達が見込めない。ひきこもりそのものを問題とみなすべきではない(思春期・青年期)。

フリースクール等での友達との交流がある

孤立するタイプの通信制だけよりも、他者との交流がある方がよい可能性がある。ストレスは上がる。

無理やり学校に行く

5軸では良いかもしれないが、ストレスがかかって他の面に悪影響がある可能性も。バランスを考える。

その発達の方向づけというのは何かという話に移りましょう。家でひきこもって孤立をしている、ひきこもり自体が大変なことで、解決すべき問題だ、という社会的風潮や規範はあると思います。僕もそれは間違いだとは言いつつもありませんが、ひきこもりそのものが問題だとは実はあまり思っていない。ひきこもりが問題なのは、もし問題にするならば、仲間集団とかの中で発達が見込めないことです。家でひきこもっているのであれば、例えばフリースクールに行き、なんていうのも1つの手です。いろいろな人との交流があるわけです。そうすると、発達が促されるわけです。

なので、月に一、二回行くような通信制で、なんとか高卒を取るよりも、他者との交流があるスペースに行ったほうが、その後、社会に戻りやすくなります。あたりまえではありますが、人と関わると、人間的な成長があるんですよね。もちろん、不登校になっている子どもですから、フリースクールやフリースペースにいけばストレスも抱えることになるでしょう。とはいえ、人間的な成長の機会を手放すのは惜しい。このあたりのバランスと、いうのをうまくとっていくというのが、支援で肝要なところですね。もちろん、無理やり学校に行くという選択をとる人もいます。学校に行けないような子に無理やり学校に行かせると、ストレスがかかってしまうので、疲労がたまり、ひきこもりになる可能性があります。ひきこもり状態になるよりも、フリースクールやフリースペースに行けるのであれば、行った方がいい。これもバランスですね。

一般的なひきこもり支援の手順

1. 本人支援
 2. 家族支援
 3. 家族関係の支援
-
1. 本人支援
 - ・本人がひきこもりやすい環境を作る(休むのは～1年)。
 - ・精神疾患・身体疾患のチェック。必要があれば治療。
 - ・社会復帰の仕掛けを考える。
 - ・スモール・ステップ。負荷は徐々に上げる。

次は、一般的なひきこもりの支援手順をみていきましょう。ひきこもり支援は、本人支援、家族支援、家族関係支援、3つに分けられます。ひきこもりの支援というと、1番目の本人支援というのがすごくクローズアップされるのですが、1と2と3、同じぐらいのレベルでやらないと、なかなかうまくいきません。ひきこもり状態にあるのは、本人なのでそこへアプローチをするというのが普通の発想ですが、本人支援の優先度というのは高くない場合がしばしばあります。

ひきこもり支援の大前提は本人がひきこもりやすい環境をつくることです。ひきこもりが治ってほしいのに、ひきこもりやすい環境をつくるのはおかしいように聞こえるかもしれませんが、ひきこもりをお休みと捉えれば、それほど変には感じないのではないのでしょうか。休み

のときはしっかり休まないといけません。居心地の悪い環境で休んでも回復はしません。ですから、ひきこもり支援の第一歩は、本人が快適に休める環境を作ることなんです。これは、一般的な常識とは食い違っていると思います。ひきこもりやすい環境を作ったら、ずっとひきこもり続けるのではないかと心配になってしまうとは思いますが、真実は逆です。とりあえず休まないと社会には戻れないわけですから、十分休ませることが重要です。休むのは1年くらいでだいたいのケースは大丈夫だと思います。この時に、家族がしてしまいがちな間違いは、毎日説教したり、「出でいけ!」と怒鳴ったり、「食べさせない」などということです。そういう環境はひどく居心地が悪いですから、ちゃんとした休みにはならないんですね。休めないひきこもり生活をしてしまうと、けっこうズルズルと長く続いてしまったりします。

居心地のよいひきこもり生活環境を整えた後は、精神疾患と身体疾患のチェックをする必要があります。精神疾患の治療が1軸の対応です。もう1つ大きな働きかけは5軸の面で社会参加への準備をどのように整えていくかです。これも親やひきこもり本人だけで考えてもあまり正解は導きだせません。相談機関で話を聞くことがよいでしょう。

では、具体的に社会にどうやって戻っていくかということですが、基本はスモールステップです。負荷がドーンとかかるとひきこもりに戻ってしまうので、徐々に負荷を上げていき慣れていくということが重要です。いち早く社会に戻りたい、学校に戻りたいというのはあるかもしれませんが、この辺は少しゆっくり、どっしり構えた方が、結局早く行けるものです。急がば回れ、という言い回しが一番しっくりきます。

一般的なひきこもり支援の手順

2. 家族支援

- 家族の言動は不適切な場合が多い(説教・叱咤)。
- 誰の責任か? という犯人捜しは意味がない。
- 家族がひきこもりを受け入れることが必要。
- 社会復帰の計画表をつくる。終わりが見えないと疲弊。
- 本音でぶつからない。家族を役割だと思える。また、基本的に計画は遅れるという認識も必要。

3. 家族関係の支援

- 家族関係を良好にする。
- 100%医療問題にしてしまうと5軸の仕掛けがおろそかに。

次に家族支援です。ひきこもり支援ではここが重要だと思います。先ほど、FBTの拒食症の話もしましたが、家族を治療の主体にすることが最も良い治療法です。家族を治療主体にすると、発達を味方つけることができるので、非常に強力なんですね。精神科の先生とか臨床心理士の先生は、会おうといっても2週間に1度であったり、短時間です。やはり四六時中一緒にいる家族が治療的になることが、最も高い治療効果が望めるのです。

スライドには不適切な行動が書いてあります。これは、人であれば思わずやってしまう行動です。説教、叱咤と書いてありますが、叱咤激励的なもの。親心的には思わず出てしまうものですが、これは効果がありません。むしろマイナスの効果が、ひきこもりを重篤化させることすらあります。また、犯人捜しも無意味です。例えば、お父さんが、子どもがひきこもりになったのは母親のせいだと言って逃げてしまったりとかすることがありますが、これは良くないパターンです。

ひきこもり生活を快適にすることが重要だと言いましたが、それには家族の協力が不可欠です。つまり、家族がひきこもりを受け入れることです。本音のところでは、ひきこもりを認められないと思うので、無理なところではありますが、無理であれば、フリだけでもなんとかしてみるしかありません。それから、家族はずっとひきこもり状態でいて欲しいほけではなく、いつかは社会復帰を目指すわけですから、計画表なんかをつくっておいたほうがよいでしょう。終わりの見えない中で物事に取り組むことは非常に苦しいことですので、だいたいの計画を立てておいた方がよいわけです。

何年後のここの日程、何年後に受験するとか、そういう具体的なものではなくて、ざっくりとした計画表ですね。

ひきこもり支援では親がつぶれないようにするケアすることも重要です。親が心地よく生きられていないと、その不満は子どもに向きます。説教とか叱咤激励が増えるわけです。それはひきこもりの支援を考えた上でも、マイナスになります。親のケアも必要です。

最後に、一番難しい、なかなかできないことなんですけれども、家族は子どもに本音でぶつからないということが必要だということについて話しましょう。本音でぶつかれば解決すると私たちは少し思い過ぎているところがあります。子どもに、ひきこもりや不登校や就労などをさせたいという目標があるならば、目的に則したやり方で対処する必要があります。

親支援とは、親が子どものひきこもり状態を担保することと、子どもを叱咤激励しないことと、親のケアの3つが主要な項目です。そして、望めるのならば、子どもに求めるのは「生きていれば OK」と存在を肯定できるように、親も考えられるようになることです。

家族「関係」の支援を3つ目にあげました。家族支援のほとんどの部分は家族の「関係」を改善するためのものです。

支援のチェックリスト

- ✓ 1軸～5軸のアセスメントは行えているか。
- ✓ 1軸～5軸の治療・介入・仕掛けは十分か。
- ✓ 発達の方向付けはうまくいっているか。
- ✓ 治療という考えは忘れずに。
- ✓ 思春期・青年期は発達を味方につける。
- ✓ 時には休むこと(ひきこもり等)も必要。

最後に、チェックリストをつけました。1から5軸のアセスメントを行えているかどうかです。1のアセスメントは精神科医療の取り組みですし、社会福祉士とか、ケースワーカーさんなんかも入ってもいいかもしれません。そういったいろいろな専門家が関わること、1つの問題に還元してしまわないことが重要です。ひきこもり

もそうですが、若年・思春期の問題は単一要因で生じるよりも、複数要因によって起こっていることが多いです。それぞれの軸での仕掛けを作って支援をしていくことが重要です。それから、発達の方角づけです。これは発達を味方につけるというお話をしました。成人でも発達はしますが、思春期・青年期では大幅な発達をします。これを味方につけない手はない。そして最後に、時には休むことも必要だということです。ひきこもりや不登校など若年・思春期におこることを悪いことと考えずに、次につながるステップの休憩のように捉えていくことも必要な視点ですね。

発表の部分ですけれども、僕のほうからは以上で終わらせていただきたいと思います。ありがとうございます。

【河津】 ありがとうございます。井出先生からは、問題を整理するということから入られまして、発達の方向性を上手に使うとか、具体的な例では、拒食症のFBTの問題、それから一般的なひきこもり支援への提言といったような話を伺いました。

それでは、地元の、品川のフリースペースを運営している中塚先生に、この後、お願いします。

■パネリスト(中塚氏)による取組紹介

【中塚】 子ども若者応援フリースペースを運営している、子ども若者応援ネットワーク代表の中塚といいます。僕自身、品川生まれの品川育ちで、地元の方はわかると思うのですが、伊藤小学校、富士見台中、通っていた学校はこれですが、僕のアイデンティティーとしては、地元の保育園、学童・児童センターと、どちらかというと、学校だけではなく地域で育てられたという思いがあります。そのため、地域にまた何か、僕自身ができることがあったらいいなと思って、子どもたちや若者たちとかかわりを持たせていただいています。

今回、昨年7月に子ども若者応援フリースペースがリニューアルして、品川区の応援で自分たちの居場所をつくることができ、日々、子どもたちや若者たちと楽しくやっています。その居場所の様子が、どんな

雰囲気なのか、なかなかお見せする機会がないと思って、撮りためた写真をスライドショーとしてまとめたものがあるので、まず最初にフリースペースがどんな雰囲気、どんな様子でやっているのかというのをご紹介したいと思います。

フリースペースは、「安心できる」「自信がつく」「仲間がいる」という3つのコンセプトで立ち上げました。一人ひとりの子どもたちが自由にこの場所に来て、自由に遊び、かかわりを持もちあっています。ゲームの前で寝ている子もいますが、うるさいと思うのですが、先に田中先生のほうからお話のありました、「安心してここにいていいんだよ」という雰囲気で居場所づくりを行っています。

子どもたちや若者たち、自由に好きなことをやっているのですが、食べることも大事にしています。お弁当や、コンビニで買ってきたものを食べることもありますが、寄付でいただいたお米を炊いて、手ぶらでも来ることができるようにしています。また、最近はお菓子づくりやパンづくりなど、「いてもいい」ということから、「何かする」ということも、少しずつ増やしています。

また、若者たちが社会に一步出ていく、そんなサポートもできたらという思いで、「社会体験プログラム」というものも始めました。ものづくりをテーマにした取り組みでは、近所にある「おばちゃんち」という団体の一時預かりの保育施設にクリスマスのデコレーションを若者たちとつくり、飾りました。

夏には品川区で主催している、西大井広場の夏祭りに、若者たちが出店をするプロジェクトを立ち上げました。若者たち自身が、どんなお店ならできるか考え、準備を重ねました。

それから、キャンプなどの宿泊イベントや、農業の体験もおこなっています。農業っていいですね。人相手の仕事ではなく、自然相手の仕事は自分と向き合うような感じで、日をいっぱい浴びながら身体を動かしています。また、田んぼがあるので、子どもたちに田植えや稲刈りの体験をしてもらい、ふだんの手入れは若者たちでおこなっています。

お手元の子ども若者応援フリースペースのパンフレ

ットを見ていただくと、とても殺風景なパンフレットだと思います。ほとんどが余白のような表紙でつくられています。2016年、週に1回からスタートしたフリースペースですが、最初から何かすることが決まっていたり、こういうものが用意されているというようなことではなく、この真っ白な状態で、来る子どもたちや若者たちでつくっていったらいいなと、そんな思いも込めて、表紙は真っ白にしました。

子ども若者応援フリースペースは、今、月水金の、朝の10時から夜の7時まで開所をしています。この月水金の朝10時から夜7時の時間は、誰でもいつでも、来ることができます。子どもから若者まで、自由に出入りができる、そんな居場所として活動しています。

今年度から、さらに品川区から応援をいただいて、火曜日と木曜日も開所することができるようになりました。火曜日と木曜日については、若者中心のプログラムを進めています。火曜日は「若者カフェ」といって、18歳以上の若者を対象にしながら、子ども抜きで、若者たちの居場所をやっています。木曜日は「社会体験プログラム」として、居場所につながった若者たちの次の一歩や、またいろいろな体験や経験ができる場として今、プログラムを進めています。

フリースペースは、名前と住所や連絡先ぐらいの簡単な登録で利用可能です。この9月までの登録分布をちょっと調べてみました。すると、本当に多世代の子ども・若者が、一つの場に来ているということがわかります。小学生、中学生、高校生など、高校生といっても、3年間で終わる子もいればそうじゃない子もいて、いろいろな学校の通い方というのがあります。高校に行っていない子たちもいるので、「高校など」としました。それから、20代、30代、40代、ついに49歳、今年50になる若者も、居場所に来ました。そんな多世代の子どもから若者までが、1つの場所に集まって、活動している。そんな居場所です。

フリースペースでは、誰がスタッフで、誰がスタッフじゃないかということが全くわからない。初めて来た方も、誰に声をかけていいかわからないとよく言われます。これも、いろいろな居場所や、今までの活動の経

験から考えて、できるだけ、スタッフがスタッフらしくないように、場に溶け込むような存在としていられたらいいなと思ってやっています。普段着でスタッフも場の中に溶け込むような形でいます。

それから、学校に行っていないとか、今仕事から離れているというような、それぞれ問題を抱えていると思うのですが、相談に来るとか、助けを求めるところから入るのではなく、まずは「ここにいていいよ」ということを大事にしているところです。学校や仕事の問題は、一旦とりあえず横に置いておいて、ここで自分らしく、今日のテーマでもあった、自分らしくいていいんだよというようなことから、関係がつくれたらいいなと思っています。

あとは、「ハートの前に胃袋をつかめ」と書いたのですが、食べることで、僕はすごく大事だと思います。若いとお腹がとてもしくんですよね。なので、とにかく手ぶらで来て、ここにはご飯もあるし、飲み物もある。品川区や社会福祉協議会から協力をいただき、災害用のアルファ化米であるとか、いつでも食べられるように用意しています。そうやって、まずはそこに来る子どもたちや若者たちがリラックスして、僕らと、またそこに来ているほかの若者たちと関係がつくれるような、そんな関係を大事にしています。田中先生のお話にもあったように、「する」ということよりも、「いる」ということを大事にして、「何かさせる」とか、「してみな」ということではなくて、「いていいんだよ」とか、「僕らもいるよ」というような、そんな場づくりを目指しています。

僕がこの実践に気づいたのは、イギリスやヨーロッパを中心に、ユースワークという実践を少し学ばせていただいて、この地域でも、このユースワークの実践ができればいいなというふうに思っているところです。「ユースワーク」って何なのかというのはなかなか難しいですし、僕もまだまだ、勉強中なのですが、ぜひ一度、フリースペースを見て、こういう居場所があるんだとか、こういうものを「ユースワーク」というんだなということ、皆さんにも知っていただけたらと思います。

僕がいろいろ説明するよりも、実際に来ている若者たちに、何でここに来ているのかということを説明して

もらったほうが早いかなと思うので、実は今日会場にもいるんですが、ここに来ている若者に、「何でここに来ているのか？」とか、「ここに来てどんな感じなのか」というようなことを書いてもらったものを抜粋したものを用意したので、読みたいと思います。

私は、フリースペースに中学2年生から来ています。中学のころから私は不登校で、一日中家にいて、ずっと寝ている生活をしていました。高校に上がって、毎日学校に通えるようになって、勉強や学校行事、部活動、アルバイトも始めて、毎日が忙しくなりました。そんな中でも、学校帰り、フリースペースに行って、お母さんから「そんなに忙しいのによく行くよね」とか言われたりして、改めて、なぜ行くのかを考えました。

考えた結果、多分、フリースペースは何もない場所だからだと思いました。学校やアルバイトの中で、何かをしないといけないという義務や責任に押し潰されてしまいそうな日々の中で、少しでも、何もしなくていい、何もない場所が安心できます。だから私は、フリースペースに来てしまうのです。この場所が、変わらず、少しでも長くあってほしいです。

これを書ってくれたのはあっちゃん、高校生です。ありがとうございます。

最初、白紙のパンフレットから始まったフリースペース。僕も手探りの状態で、今も実践を続けているところではあるのですが、こんな、何もない場所が安心できるというのは、僕にとっても大きな発見でしたし、ぜひ、そういう場所が、ほんとうに地域に根ざして、子どもたちや若者たちの身近な存在としてあるといいなというふうに思います。

逆にいうと、そういった、いていい居場所、いられる場所というのが、子どもたちの周りからどんどん奪われているなということも、最近強く感じるようになりました。

最初、立ち上げたときは、家庭があって、学校や職場があって、そして僕らのような居場所がある。第三の居場所としてのサードプレイスというような、そんなイメージで始めたところではあるんですが、最近、なんか

おかしいぞというふうに気づきました。とにかく、ファーストプレイスといわれる家庭、セカンドプレイスといわれる学校や職場が、ほんとうに彼らの居場所になっていない、機能不全に陥っていると強く感じます。そして、私たちのような、サードプレイスとして始めたフリースペースが、彼らにとって、子どもや若者たちにとって、ファーストプレイスになっている。昨日、フリースペース眺めながら、なんかここは、とっても大きなリビングルームのような感じがして、そしてみんなが1つの家族であったり、お母さんみたいな人がいたり、兄弟みたいな人がいたり、でもなんか、赤の他人もちよっとしているかなとか、そんなようなつながりのある居場所になっている。

昨日も、「帰りたくない、帰りたくない」って言っていた中学1年生の子がいました。もう7時で終わりだから、閉めなきゃいけない、という話をしたのですが、その中学生は、「学校や家に、僕の自由はないんだ」と言ってきました。「今はフリースペースしか自分が自由でいられる場所はないんだ」って。「家に帰ると、お父さんに暴力を振るわれたり、嫌なことを言われたり、ほんとうに自由にいられる場所はここしかないんだ、もう少しいさせてくれ」と彼は訴えてきました。ほんとうに、こうした居場所をつくるということと、また、家庭や学校の問題、どういうふうに考えていったらいいのか、すごく考えさせられます。

そんなわけで、いろいろと悩みも多くて、ここで利用している子どもたちや若者たちを前に、僕が悩みを語ってどうするんだというような感じでもあるんですが、今、利用者の登録が昨日数えたら177人までできました。とても多くの子どもたちや若者たちとつながりをもつことができている。毎日の利用者が20人から30人、多いときはスタッフも合わせて40人近くになり、もう大分手狭になってきているというようなことも実感しているところです。そんな中で、もっと彼らが生きやすい、住みやすいまちづくりだとか、地域づくりってどうしたらできるのかなということを考えさせられるし、どうしたら変えていけるのかなということも考えるようになりました。

私たちのような居場所を運営する、そういうことも

もちろん大事ですが、また彼らが安心して世界を広げていけるような、つながっていけるような、そんな地域や次のステージ、次の居場所というのもつくっていききたいなというふうに思っています。

最後に、映像の最後に入れた画像ですが、僕がいつも仕事をしている机の前には、レゴブロックがジャラジャラジャラと並べてあり、子どもたちや若者たちが机の前に座って、勝手に何かつくりながら、日ごろの様子だとかいろいろと話をしてくれます。中には「もう自分は生きている意味がない」と言って、自宅の4階から飛び降りた18歳の若者がいるのですが、今、居場所にぽつぽつと来てくれて、僕の前に座っては、そこにあるレゴブロックをこんなふうなすてきな作品にして、来るたびにいろいろと変えてくれます。そんな若者たちともつながりながら、僕は何ができるんだろうとか、この居場所はというふうにしていったらいいのかなというように考えさせられる日々を送っています。

また皆さんと一緒に、この場づくり、つくっていきたいと思いますので、ぜひご協力下さい。どうもありがとうございました。

【河津】 中塚先生、ありがとうございました。他区等でも、若者に対するフリースペースがあるとか、あるいは不登校の子どもが来る場所もありますけれども、小学生、それから50歳近い人までが集まれるフリースペースというのは、ここだけのようです。そういう意味で、品川区としても誇るべき施策だろうと、私は思っておりますけれども、実際に実績を上げている。ただし、このまま誰でも来られるかという入り口問題はどうなっていくのか。それから、出た後、出口問題ですよね。出て行った後の社会とどう折り合いをつけていけるかという課題が残っているようにうかがっておりましたけれども。

9月に、私も子どもたち、それから若者たちがいるときにお邪魔させていただきました。中塚さんは今日よりももっと若い感じで、目が輝いていました。全く緊張がほぐれていて、すごく中塚さんらしい雰囲気が出ていたところを見せていただきました。子どもたちも、

まさに先ほどの映像のとおりでした。

■パネリスト(登壇者)による意見交換

【河津】 それでは、登壇者の方々の間で意見交換していただきたいと思います。今、お2人の話を伺って、田中先生のほうから何かございますでしょうか。

【田中】 すごく面白かったです。思わずメモをとりながら聞いていたのですけれども。井出先生のお話を聞いて、もう少し突っ込んで聞いてみたいことがあり、こちらからの質問に答えていただければと思います。実際、お話を聞いていて、ひきこもりへの支援ということに特化してお話を語りながら、1つ、すごく大事なことで、ひきこもりだけとなって青年たちが陥ってしまう心の迷路みたいなものとか、それに対する対策みたいなところを、もうちょっと広い視野で実は考えておられるんじゃないかなという気がして、聞いていたんです。

【井出】 そうですね。ふだんはひきこもりの話をしてくださいとか、不登校の話をしてくださいと言われるので、100%ひきこもりの話をするのですが、今回、もうちょっと広い代わりに、年齢が若年・思春期だったので、主だった問題の具体例を出しています。そこから課題を抽出して、共通するものにまとめ上げられればと考えていました。田中先生のように読んでいただくと、僕はほんとうにうれしいなという感じですね。

【田中】 ありがとうございました。やっぱりそうだったかなと。そうすると、またひきこもりということだけではなくて、もう少し広く捉えて、例えば今の時代に提言というか、個々の、この例から推し量る、中塚さんの活動みたいなことを、例えば、先生のお話の中で、どの辺に位置づけていけるのかが、どんなあたりに焦点を当てた活動というふうになるかということをお聞きしていいですか？

【井出】 さきほど家族を支援すると話をしました。家族を支援することはどの問題でも最も強力な支援だと思うのですが、それができない時もあるわけです。家族がいないとか、家族の中で暴力が起こっているとかそういうときです。その時には家族の代替物み

たいなものを用意する必要があります。家族以外のことであっても、学校で多くの生徒が身につける仲間づくりだったりとか、そういったものが学校でできない子というが出てくるといったこともあります。やはりそこでも学校の代替物が必要となる。1つのルートだけで社会性をつけましょう、成長していきましょうというのは無理な話で、そこになじめない子どももいるので、代替物を用意しておくことが重要です。

今のところ、中塚さんのところがかかなりの部分を担ってしまっているようなんですが、他の選択肢もある状態の方がよいと思います。そういう場合には、選択肢が多い方がいいわけです。

家族機能はなかなか直らないと思うので、社会の中に代替物が必要です。

【田中】 ありがとうございます。中塚先生になんですけど、先ほど司会のほうから、出口問題みたいな話がありました。今後、どういうものに発展していったらということを書いてみたいと思います。今、井出先生の話にもありましたが、今、それを、中塚先生の活動が一手に引き受けているのではないかと。どう広がっていくのかがいいのかなと、私も聞きながらずっと考えていました。きっとそこに丸投げすれば何とかしてくれるというのではなくて、何かもう少し違うことが、区の中で、あるいは家庭で普通になっていったら初めて、みんなが支えていける形みたいなのができて、きっとそれが、モデルケースとして、少し先駆けたことをやっているんじゃないかなということを思っています。何かイメージをお持ちかなというのを聞いてみたいと思います。

【中塚】 ありがとうございます。まだ、この場所を立ち上げて1年ちょっとしかたっていないので、今後の展開についてはじっくり腰を据えながらやっていきたい、考えていきたいなというふうに思いつつ、ただ、来ている若者たち、これでつながった若者たちの次をどう考えるかというようなことは、おっしゃるとおり人数もどんどん増えてくるので、どんなふうに居場所を増やしていったほうがいいのか、拠点を増やしていったほうがいいのか、何かいろいろな選択肢を増やしていったほうがいいのか、そういうことは、ぜひ、皆さんのお知

恵も借りながらやっていきたい、つくってきたいなというふうには思っています。

1つ、今考えていることで言えば、不登校、学校から離れるということについては、わりと地域も含めて、大人も含めて寛容になりつつあるなというふうには感じています。なので、学校に来られないなら、フリースペースにおいてとか、行っていいよということは、大分認められてきたのですが、ひきこもっていたり、今、就労から離れている若者たちにも、フリースペースにおいてとか、来てもいいよというふうに言うんですけども、「働かない」ということに対する後ろめたさや社会的なプレッシャーというのは、まだまだ強いものがあるなと感じています。焦らなくてもいいんだよということは確かなのですが、彼らがもっと活かせる場や、生き生きと若者たちが働けるような、そんな地域や現場もつくってきたいし、今こうしてつながりや信頼関係ができている若者たちが、もし地域で生き生きと活躍できるような展開が、もし広がっていけるのであれば、ぜひ、つくってきたいと思っています。

【河津】 登壇された他の先生から、何かご質問があればどうぞお願いします。

【中塚】 僕が伺いたいのは、こうやって子どもと若者たちとのつながりは今、充実してきているなという実感はあり、子どもたちや若者たちのハートはわりとこう、つかむコツというか、実践的に何となくわかってきたんですけども、親であったり、保護者であったり、家族をどんなふうに支えていったらいいのかとか、何ができるのかなというような、親たちも元気になってほしいなというときに、どんなことができるのかというようなことを伺えたらいいなというふうに思っているのですが。

【田中】 子どもの範囲の中で少し1つ。今、家族だからといって、負わなきゃいけないと思っちゃっている重いものが多い気がするんです。もう少し身軽になって、子どもってみんなで育てるんだよねって言えばちゃんような状況が生まれると、家族はもっと手を組みやすくなる。

多分、もともと日本って、わりとそういう社会だったのではないかな。子ども、親がなくてもという、自分の子

どもをみんなが育ててくれるという意識で、きっとやっていたんじゃない。それがどんどん個人化していく中で、子どものことはみんな親が引き受けなきゃいけない、みたいにだんだんって、親、お母さんなんだから頑張ろうみたいな感じが強くなってきて、それがすごく、子どもに対しての責任感で、子どもをある方向に方向づけようとして、それが子どもとの関係をうまくなくしてしまうことも、多々あるし、親も身動きがとれなくなってしまう。あるいは、周りの親御さんが、同じようなことで困っている人と、なかなかつながりづらくなっちゃって、つながりづらくしているみたいかなというようにずっと思っています。この辺が突破できると、親がもう少し身軽になれるし、子どもにとっても、親というのは、当然、自分のことを考えている人だろうみたいなんじゃないところで育つ文化が持てるようになっていくんじゃないかなという気がしているのですが、どうでしょうか。

【井出】 日本の歴史の話をさせていただきたいんですけども。日本の家族というのができたのは大正時代になるんです。もちろん、明治ぐらいから言われていて、家族というのは、多くの翻訳語でできた言葉なんですけれども、家族で子育てをするというのは、たかだか明治時代からの話であって、それまでは子どもの教育を1つの親、1つの家族が担うという、そういう子育ての仕方ではなかったんですね。お母さんが一手に家族の子育てを担うというようになってきたのも大体大正時代。ちょうど大恐慌の時代に、父親が失職して、それで母子心中というのが起こるのが大正時代でして、そういった中、家族というものを全部引き受けて、失敗したら2人で死んじゃうみたいなものというのができてきたのは大正時代で、そういうの、実は江戸時代にはそんなになかった話なんですね。

だから、そんなにうまくできたシステムではそもそもないわけですが、家族というのは。それが子育てとなると、システムがうまくできていなくて、やっぱり家族教育、家族で家庭教育ですか、家庭で教育するというのは、やっぱり大正それから昭和ぐらいから始まった文化です。家族というのはそもそもそんな機能をもとから持っていたものではなかったというふうに割り切ってしまう

ば、実際問題、別のもので代替できるものではないかなと、歴史的に見れば見えるのではないかなと思います。

【田中】 そうすると、家族の役割というのは、なんか機能的に何かしてあげる、お金を出してあげるものとか、そういうところじゃなくても、子どもにとって親でいてあげるというだけでいいんじゃないかなみたいなことの思うんですけど。

【井出】 僕もそのぐらいですね。

【田中】 きっとそこに、一致点というか、やらなきゃいけないことはあっても、いてあげるというのが一番大事だよなと思えば、家族って、もうちょっと今、形態も違っているし、働き方も、つながり方も少し違ってくるんじゃないかなという気がする。どうですか。

【中塚】 そうですね。ほんとうにいてあげる、いてあげるだけでいいというのは、家族にとってとても心強いというか、あまり多くのものを引き受けるというようなことは考えなくていいという、歴史的にもね、そんなにやってきたわけではないというようなことは、すごく説得力があるなというふうに思いました。

子育てのことでいうと、今、親の世代は、子育てのアウトプットというか、「育てた」という実感がなかなか持ちにくくなっていると思うんです。僕とか、僕よりもうちょっと前だと、学歴や親の年収を超えることって、わりとやすくてできた。自分は高卒だけど、子どもには大学に行かせることができたとか、会社勤めに行かせることができたというのが。今は、親も大卒で、それなりに働いていて、今の若い子たち、そんな親の学歴も親の年収も超えるような生活ってほんとうに難しくなっている。親としても、子どもが親を超えたのかというのがわかりづらくなって、子どもも、親を超えたなという実感が持ちにくい。そこで、すごくギャップというか、お互いの関係性がもう少し違う、「いいいいんだよ」というだけでつながりが持てるものが、もっともつとあったらいいなというふうに、伺っていて感じました。

【河津】 私も15年ぐらいは東京都をやめてから、大学で教員をやっていましたが、私の場合は教育関係の中でも保育士養成が主で女子学生が多かつ

た。大学に来ている女子大生で見ると、親との関係はとってもいいのです。特に、母と娘がすごくむつまじいという感じがあって。今の親子を見ていると、話題も共通だし、結構戦隊ものを親が見ていたし、子どもも見ているとか、親も子どもも恐竜が好きだとか、いろいろ共通項があって、仲良くはしているんですけども、家族を一步出ると、非常に緊張感が強いんだろうなということは、よく感じるところですね。

もうちょっと身近なところで、品川区の子ども子育て調査の中でも、新制度の中で、5年前に調査をしたときに、乳幼児を育てている家庭の専業主婦は 38.8% だったんですが、今年の1月の調査では、27.6%と減っているんですね。反対に、両親ともにフルタイムは5年前は44.3%ですが、なんと今回は57%まで増えています。家庭の中で愛着関係(アタッチメント)を形成するところから、子どもたちの育ちはスタートしますけれども、非常に大きな地殻変動が起きている。

それから、地域福祉計画策定に幾つかの自治体でかわかっていましたけど、地域福祉という言葉がむなしいうらいなのです。地域で動ける人は誰がいるのだろうかというときに、結局、65歳まで働く元気な方は、さらにその先もというようになってきている。女性たちも、8割働けということのようですけど、今、7割以上になっていますね、先ほどのフルタイムフルタイム同士の夫婦も増えています。一方で自営業は減っている。

こういう中でコミュニティの維持について、品川区はほんとうに頑張っています。青少年問題協議会でも、それぞれの地区で自然体験をしたり、さまざまに活躍されている方がいらっしゃる。それから、「83運動」で8時と3時に、地域の子どもをしっかりと見ようとか、品川区は東京の中で一番駅の数が多いそうですけれども、駅があれば商店街ができて、そこに人が集まる。その中でまだ、昔ながらの自営業が結構、残って、活躍をしています。そういう意味で、いろいろな仕掛けがまだまだあるんじゃないだろうかという気がします。ですから、仮に登壇者の中に、品川区の方がいらっしゃれば、コミュニティーをこれからどういうふうに、どのように品川区はつくっていくようにお考えでしょうかということも

聞いてみたいぐらいです。

■パネルディスカッションまとめ

さて、登壇者の方は、3分ずつでそれぞれのまとめをしていただければと思います。中塚先生のほうからどうぞ。

【中塚】 僕自身も、今日、ここに登壇しながら学ばせていただくというような、貴重な機会をいただきましてありがとうございます。

まとめというよりは、せっかくの機会なので、少し、過激な提言というか、提案をしたいなというふうに思います。そんなに驚かなくて大丈夫ですけど。これから、地域や社会にでていく子どもたちや若者たち、ふだん、接している僕らから彼らの言葉を代弁するというほどもないかもしれないのですが、その願いとしては、地域や社会に暴力と差別と不公平をなくしてほしいというのが、子どもたちや若者たちの強い願いなんじゃないかなというふうに思っています。

そして、「いいいいんだ」という話が今日、繰り返し、何度も話されたと思うのですが、ただいりだけではなくて、自由にいられるということです。暴力や差別や不公平がなく、その子が自由でいられるというような、そんな地域を品川でつくっていけたらというふうに、今日、改めて感じました。

ぜひ、この居場所、まだまだ小さな居場所ではあるんですけども、皆さんと一緒に子どもや若者たちが元気に、自由でいられる場所をつくっていきたいなというふうに思います。どうもありがとうございます。

【河津】 大変ありがとうございました。井出先生は大阪のほうでいろいろなプロジェクトにかかわっていらっしゃるようですが、最後にまとめをどうぞお願いします。

【井出】 そうですね。being の話が出たので。being に well をつけると、Wellbeing(ウェルビーイング)、もしかしたら田中先生、そう自身は思っていたのかもしれないですけど、Wellbeing というのは「幸福」という意味なんです。Wellbeingは翻訳しにくい言葉なんですけれども、「よくいる」というだけではなく、差別もなく、居

場所もあって、幸福に感じられる在り方だと思います。そういうふうな人生を過ごせたら、僕自身も過ごしたいわけですが、もし、不登校なり、家庭内暴力なりで、そういうことがなかなかかなわないような子どもたちがいた場合に、行政がサポートするような形で、子どもたちが Wellbeing を達成できるような環境を提供できると、みんなが幸せに生きていけるんじゃないかというように思いました。

【田中】 今日、ご一緒させていただいて、ほんとうにありがとうございました。すごくおもしろかったです。

自己紹介のときも言ったように、大病院の中で暮らして以来、今、少し地域で近いところで仕事をしていて、なんて生活って大事なんだろうということをすごく思うんです。大きなシステムをつくるよりも、地域でまだまだ工夫をすることとかいっぱいあるし、やれることというのは、ある種パワーがあるというふうに、僕は改めて最近信じられるようになった気がする。

子どもの居場所のことでは、地域の活動として例えば無料塾とか、こども食堂とかいうのがよく言われる。そういうことを做ってやればいいというのではなくて、自分たちの地域でなら、自分たちの身の丈にあったことだったら何ができるだろうということを探して、たどり着いた結論のような気がするのです。そういう意味で、ぜひ、品川ならではのことというものを展開してほしい。そのときには、今の中塚さんたちの活動というのは、やればニーズはあるんだということの先鞭をつけた、すごく大事な仕事を担っているのではないかなということを思いました。今日はほんとうにありがとうございました。

【河津】 今日のお話の中でも、各家庭の問題、コミュニティの問題、そして現代社会それぞれに課題がありました。私も、保育士養成の中では、アタッチメントという愛着形成の問題がいつも出てくるわけですが、土居健郎先生の『「甘え」の構造』の「甘え」ということと、アタッチメントがどういう関係になるのかなというのは、ずっと私の中でもありました。土居先生の本の中には「愛される方は傷つきやすい、愛されるということとは甘えと言いかえてもいいのですが、傷つきやすい。

というのは相手次第ということがある」と。反対に、「自分が愛するというのは、相手がどうであれ自分は愛する」というほうは、精神的に傷つかないことになりそうだけど、それを強調する中に隠れた自己中心主義が入っているような気がする」という言葉があるのです。それで、「愛されている」というと受動的に愛を受けているようだけれども、赤ちゃんとか幼児が、お母さんに抱かれていたときに、ほんとうは、あの美しくよいものに心を開いたのだ」という見方もしていますね。土居先生はいろいろな表現をされていますけれども、乳幼児期だけでなく、生涯にわたって愛する、愛されるという関係は続く。これは高橋恵子さんという、発達心理学の先生も書かれているものですね。だから、幼児期の関係が、生涯にわたって続くというわけじゃなくて、その後、どういう人生を経ていくかということが言われている。

それから、私自身は、知的障害の施設の理事長もやっているんですが、やっぱり人間の幸せを考えると、1つは見通しがつくということですよ。言ってみれば、時間と人と場所とすることがセットで、大体、頭に入っているんで、見通しがつくということは、展望とか希望と言えらるわけですね。

それから、2つめは仲間がいるということです。仲間との関係は愛といっても良いでしょう。3つめは自分にとって意味のある行動が必要です。知的障害の世界では芸術活動や作業があります。多分、子どもたちであれば学校とか勉強。若者であれば職場、仕事。さらにサークル活動や趣味の世界の中で3つの要素が1つになればよいと思います。その意味で、もっと広く長く、人間が生きているということの、being の中に、そういう問題が含まれているんだというふうに私は思っております。

これで終わりにいたしますけれども、私は品川区にとっても期待しているわけです。まだ、ほかよりもコミュニティが残っているし、まだまだ人と人の触れ合いが残っている区であって、しかも、子ども若者計画をつくって、この中には、ほんとうに一般的な施策もいっぱい入っているんですが、その中でも特に生きづらい子

ども、若者に焦点を当てて昨年、2年前から進めてきて、フリースペースをつくり、今日のパネルディスカッションにつながったということで、この私が敬意を表していますし、できる限りは品川区に協力をしていきたい。そんなふうに思います。

それでは、登壇された3人の先生方にもう一度、拍手をお願いします。(拍手)

ご来場の皆様、ほんとうにありがとうございました。



品川区子ども・若者シンポジウム2019

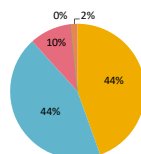
「自分らしく生きる～孤独と共生を考える」

- 開催日時 令和元年 1 月 9 日（土）午後2時～午後5時
- 開催場所 昭和大学上條講堂
- 参加人数 189名

<参加者アンケート>（回答129件）

Q1 大変満足	57	44.5%
満足	56	43.8%
普通	13	10.2%
やや不満	0	0.0%
不満	2	1.6%
	128	

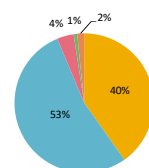
Q1 満足度



「大変満足・満足」と答えた参加者は 8 割以上（88.5%）

Q2 大変役に立つ	51	40.2%
役に立つ	68	53.5%
どちらとも言えない	5	3.9%
あまり役に立たない	1	0.8%
役に立たない	2	1.6%
	127	

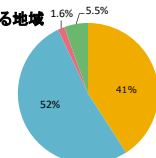
Q2 役立ち度



「大変役に立つ・役に立つ」と答えた参加者は9割以上（93.9%）

Q3 区内	52	40.9%
23区	66	52.0%
都市町村	2	1.6%
都以外	7	5.5%
	127	

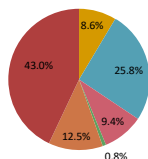
Q3 住んでいる地域



参加者の住んでいる地域は区内が4割で、区外在住が6割。
（ただし、区外在住者には区内在学・在勤も含まれている。）
都以外では千葉県、埼玉県、神奈川県などから参加。

Q4 当事者	11	8.6%
一般	33	25.8%
NPO・任意団体	12	9.4%
企業	1	0.8%
行政関係	16	12.5%
その他	55	43.0%
	128	

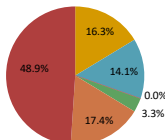
Q4 立場



「その他」の中には、青少年委員も一部含まれる。

Q5 福祉系	15	16.3%
教育系	13	14.1%
雇用系	0	0.0%
保健・医療	3	3.3%
保育・子育て支援	16	17.4%
その他	45	48.9%
	92	

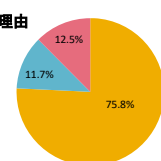
Q5 属性



「その他」の中には、青少年委員も一部含まれる。

Q6 関心があった	97	75.8%
業務上必要だと思った	15	11.7%
その他	16	12.5%
	128	

Q6 参加した理由



Q7 キーワード（上位5つ）

being、doing	60
居る、居るだけでいい	22
フリースペース、サードプレイス、居場所	17
コミュニティ	8
自尊心、自尊心、尊重	4